281
37

1

0051942000

0051942-000

２８１－３７

大学評判記

榛名譲・著

日本公論社

昭和８

AHN

この著作物は、著作権者不明のため、著作権
第６７条の規定に基づき、平成１２年３月２
けで文化庁長官の裁定を受け使用するもので

34.10.16

榛名讓著

大學評判記

東京 日本公論社版

~~645-134~~
281-37

序にかへて

學士の氾濫に次ぐ氾濫、業界の不振、就職難、失業と、この悲慘な社會相は次第に學士の價値を低下せしめ、大學無用の暴論さへも起りつゝある。けれども、この苦難な社會に處するに當つてこそ、必要不可缺な武器として、最高の常識、即ち、最も新しい、最も正しい社會的認識を深めなければならぬ。

これがために、大學が果して適當なる機關であるや否やは別として、今日に於ける最も優れたる指導者の集結場として、決してその存在を無視することは出來ない。著者が、敢て大學の評判に筆をそめたのもこれがためである。

本書に於ては、大學の嚴正なる解剖、批判を目標とせず、むしろ、現狀に於ける設備と人の配置、創設以來の社會的貢献等々、およそ活社會と交渉ある方面をのみ見ようとした。故に大學を選定せんとする學生は、本書によつてその輪廓を

知る資料たらしむるもよいであらうし、すでに世に出でて實務にたづさはる人々は、母校を顧みて、先輩諸氏のその活躍系統を探ることも、亦興味のつきぬものがあらう。

要するに本書は、大學に進み行かんとする若人のために、よき案内書として、大學に關する概念を與へ、進んで將來の活躍方面への針路を示す指導者としてのよき役割を演ずるであらうことを信ずる。

昭和八年十一月

著者

目次

大學風景……（一——一三八）
東京帝大モンタージュ……三
京都帝大の勢力網……二三
早稲田大學物語……四〇
慶應大學氣質……五五
明治大學と東洋大學……七三
商科大學國立の新陣容……八五
中央大學と法曹界……九一
フレッシュな法政……九五

新興立教……一〇〇
純日本的な日大……一〇四
地味な專修大學……一〇八
理學部全盛の東北大……一一〇
北海道帝大の今昔……一一七
沈衰の同志社……一二三
不遇な京城帝大……一二六
災厄の續いた九大……一三一

學界人物傳……（一三九——一九六）

東西帝大の二巨人……一四一
早大總長穗積博士の横顏……一五三

東都大學名物教授……一六七
學界雄辯家の群像……一七二
博士物語……一八六

秀才鈍才物語……（一九七——二〇〇）

（一）首席獲得爭覇線上の人々……一九九
（A）帝大法科二十八年組と海兵二十二年組……一九九
（B）早大政經科三十八年組と商大二十一年組……二一七
（C）帝大法科大正四年組……二三一
（D）帝大四十二年組と陸軍第十二期生……二四五
（E）東大四十一年組と慶應二十二年組……二五九
（二）首席とビリの豪傑……二七五
（三）學界の人氣男末弘博士の横顏……二八四

大學風景

東京帝大モンタージュ

プロローグ

『赤門』、『最高學府』、『官學の牙城』――さうした名の下に、長く聯想されて來た東京帝大であつた。總理大臣としての故加藤高明、若槻禮次郎、濱口雄幸を生み、世界的學者としての櫻井錠二、田中館愛橘、長岡半太郎、本多光太郎を生み、文豪としての高山樗牛、夏目漱石を生み、その外、現代日本の大政治家、大實業家、大學者の最大多數を生んで、世界的學府の面貌に輝き『現代の覇權』に誇る東京帝大！

『赤門』――藩侯の榮華を偲ぶ朱の色に、それは大時代的な壯麗さで立つてゐる。此の封建の門の名が、時代の尖端を往き、人類文化にさきがける東京帝大の別稱であるとは！だが、誇りかな此の名で呼ばれるものこそ、夢多き青年の胸に、その甘美な、或ひは崇高

な希望と理想とを植えつけた天國ではなかつたであらうか？　誰しもが、この學問の白光に充ち輝いた殿堂に、一度は人生の憧れの火を燃やしたではなからうか？

世は、どんなに就職難の狂嵐時代であらうとも、學問の市場價値がどんなに下落しようとも、この『學の殿堂』の扉をめがけて、いまもなほ、州郡の粹を抜く秀才兒の群は、ひしめき殺到する！

いざ、われらもまた『赤門』の名によばれる『汝』を見んために、一歩をその入口に印しようではないか？

正門

本郷の通りに向つて、封建的古典的な赤門と竝んで立つ近代風な石造の正門、それは故濱尾總長時代に、毎年の卒業式に陛下行幸の儀仗兵の槍の穂先きが觸らぬやうにと、高く造られたものであつた。『官學』と『特權』とを象徴するかのやうに、それは嚴めしくそゝり立つてゐる。學窓より社會への、そしてまた、社會より大學への通路だ。そこには大學

の過去と未來との雰圍氣が、交錯しつゝ此の門を境界として流動する。眉秀でた五千の角帽群が、慌だしげに出入する。五百のプロフエッサー達は、重々しい足どりでやつて來る。都見物のお上りさん達は、この大學の入口を、まづ讃嘆のまなざしで仰ぎ見つゝその下をくゞる。學校の見學團が長列でそれに續き、復興新校舍の建築用材を滿載したトラックがハイ・スピードで突入する。圓タクも、また時としては撒水車さへもが……。

世界的學府の面貌

銀杏の樹は、植物學上『東洋』をシンボライズするものだ。正門を潜るとこの東洋を代表する學府にふさはしい銀杏樹の並樹路だ。その路のつきたところ、正面に空高く聳ゆる茶褐色の高塔は、これぞ中央大講堂だ。震災復興第一に、安田家寄附百萬圓によつて竣工したもので、華麗なシヤンデリヤの輝く下、優に五千名を收容する大伽藍だ。屢々こゝに國際的學術會議が開催され、學界の王宮と稱せられてゐる。

大講堂に對してバグダッドの王宮を望み見たやうな、雄大な大圖書館は、米國ロックフ

エラー財團の寄附四百萬圓と復興基金百五十萬圓を合して出來た典籍の殿堂だ。藏書七十萬卷、これも世界各國の同情による寄附の賜物で、眞に全人類的努力の結晶だ。

大體、この土地は、加賀百萬石の藩邸跡だ。古寂な大池を圍んで鬱蒼たる大樹、またその間を縫うて、法文經理工醫の各學部の校舍が、最新の型裝を競うて、布置されてゐる。郊外駒場にある農學部も、近く郊外移轉する一高の跡に引つ越して來るから、全敷地二十四萬坪、堂々たる威容を誇りつゝ、こゝに完備した綜合大學の理想を實現するわけだ。

が、新しき革囊には、新しき酒を盛れ！　世界的學府の面貌をとゝのへた東大の、次にはその腦髓を見せて貰はうではないか？

まづ教授の顏觸だ。

大學の腦髓

東大の總長は小野塚喜平次博士だ。政治學の權威で、日露戰爭の時、開戰論を强硬に主唱した七博士の一人でまた濱口前首相、前商相俵孫一氏、前外相の幣原喜重郎男等と同窓

の帝大二十八年組で、然もその首席だつた秀才として、世間的にも甚だ有名だ。貴族院議員として政界に參與してゐるが、學者らしい人格と、調和的な政治家的手腕とで、大學行政の方でも近頃の名總長と謳はれてゐる。

次に、各學部の花形教授を物色しよう。いづれ劣らぬ學者揃ひ、學界のオール・スターキャストだ。撰び出すのに骨が折れるが、まづ法學部から——。

前法學部長の穗積重遠博士は、帝大法科の開祖ともいふべき故穗積陳重博士の嗣子だ。陳重博士は令弟の故穗積八束博士と、法科大學を牛耳つて、帝大の法科か、穗積の法科かと稱せられたほどの人で、樞密院議長の要職にあつて亡くなつた。重遠博士はその人の御曹子で、男爵家の跡目相續者だが、少しも華族ぶつた風がなく、邸から大學へも電車のつり革にぶら下つて通ふ平民ぶり、親族法の大家で、婦人問題の理解者として聞えてゐる。

この法學部は、我國官吏養成の中心機關だつたから、教授にはいづれも法學界最高の權威者ばかり、憲法界の元老美濃部達吉博士をはじめ、刑法で名高い牧野英一博士、民法の新人といふよりも全法學界の花形として輝く末弘嚴太郎博士（現學部長）、行政學の蠟山政

道教授、その他國際法の神川彦松博士、商法の田中耕太郎博士、刑法の小野清一郎博士など、一國一城の主が控へてゐる。

法學部に隣つた經濟學部は如何？　學部長はマルクス排擊の急先鋒土方成美博士。また前部長だつた保險學の森莊三郎博士は學習院を出る時に一回、東大を卒業する時一回と都合二回銀時計を頂戴したといふ秀才だ。また財政學で名聲嘖々たる大内兵衛教授、自由主義の社會政策を講ずる河合榮治郎教授、殖民政策の矢内原忠雄教授、その他錚々たる人物が揃つてゐる。

文學部は支那哲學の權威宇野哲人博士が學部長だ。哲學界の大御所桑木嚴翼博士や、宗教學の姉崎正治博士、教育學の吉田熊次、春山作樹、入澤宗壽の三博士、國文學の藤村作博士　英文學の市河三喜、齋藤勇の兩博士、史學の黑板勝美、村川堅固、池内宏の三博士その他元老新人雲の如く、名にし負ふ赤門文科の陣容を形成してゐる。現滿鐵總裁林博太郎博士なども七年度迄は教育の講座を擔任した。

轉じて醫學部へ廻らう、こゝも大變だ。學部長の長與又郎博士は病理學の大家、前學部

長の林春雄博士は藥物學の大先輩だが、ボート界の先輩としていつも隅田川の各大學のレースには名委員長ぶりを發揮してゐる。内科の稻田龍吉、島薗順次郎の兩博士、外科では濱口さんを手術した鹽田廣重博士、博士嫌ひで氣を吐く物療内科の眞鍋嘉一郎教授、眼科の石原忍博士、生理學の永井潛博士、藥學の朝比奈泰彦博士、法醫學の三田定則博士、等等、擧げ始めたら際限がない！

理學部は植物化學の柴田桂太博士が學部長だ。吉村冬彦のペン・ネームで光る物理學の寺田寅彦博士だの、化學の柴田雄次博士をはじめ、物理學の清水武雄博士、天文學の平山清次博士、地質學の加藤武夫、坪井誠太郎博士等、氣象學では天氣豫報で名高い藤原咲平博士、いづれも學界の珠寶だ。地震學で名高い今村明恒博士は、先頃停年で退いたのが惜しまれてゐる。

工學部には、學部長の田中芳雄博士（應用化學）を始め、澁澤子爵の一門である澁澤元治博士（電氣學者）應用化學の大島義清博士や、機械工學の加茂正雄博士、兵器で名高い青木保博士、船舶工學の山本武藏博士、高速度撮影機で世界的に名を馳せた栖原豊太郎博

士等、我國工學界の尖端人が、その研究を競つてゐる。採鑛冶金の元老で、かつ刀劍研究の權威と目される俵國一博士や、建築學界の古老伊東忠太博士なども、停年制で最近退いた。

農學部は林學の諸戸北郎博士を部長とし、農藝化學界の明星麻生慶次郎博士、ヴィタミン研究の世界的權威鈴木梅太郎博士をはじめ、釀造學の高橋偵造博士、農政經濟の那須皓博士、動物學の鏑木外岐雄博士、三宅驥一博士等々、こゝにも多士濟々だ。

これで大體濟んだが、まだ各種の附屬研究所がある。こいつが見逃せない。駒場にはその設備では世界一を誇るといふ航空研究所（所長教授和田小六博士）がある。また芝には傳研の略稱で醫學界に君臨する傳染病研究所（所長教授長與又郎博士）がある。郊外三鷹村には東洋第一の東京天文臺（臺長教授早乙女清房博士）がある。相州三崎の臨海實驗所（所長教授谷津直秀博士）また、小石川にある舊幕府藥草園跡の植物園（園長教授中井猛之進博士）大學構内の地震研究所（所長教授石本巳四雄博士）も世に聞えてゐる。その他、全國に散在する農學部の附屬農場・演習林等々。

——さてこれで一應は東大の横顔は素描された。王宮にも見まがふ豪華な構築、最新尖鋭の學術的施設（それは億に上る莫大な復興豫算費においても想察される事實だ）そしてまた、當代第一流の權威を網羅したその學的陣容、全國の秀英を拔いた學生の氾濫！

だが單にそれだけならば、アメリカ大學を語つた方がよい。東大を語るには、新日本の生長と共に生長し來つた六十有餘年の生きた歴史によつて裏づけられなければならぬ。

開成學校時代

黒羅紗の帽子に金文字で『開』の一字、荒つぽい紺がすりを裾短かに着流した開成學校の書生さん、——末は參議か、博士かと謳はれた時代、學校は今の神田一ッ橋の如水會のあたりにあつた。錦町河岸の清澄を越えて、千代田の松の綠がながめられた。

教師は、全部外國人、講義も英語、試驗も英語、教科書も無論英書で、教師の中には宣教師さへ交つてゐた。その後、ボツ〳〵日本人の教師も加つて來た。文科には外山正一博士、理科には菊池大麓博士、法科には井上正一博士、といふ風に。が、おどろいたことに

は、それらの人々が、やはり英語で講義をするんだ。中には、隨分怪しい英語もあつたといふことである。

その代り、學生の方も、今とは變つてゐた。今は故人の穗積陳重博士などが、貢進生の肩書きで『わしは宇和島藩の出身で……』と肩で風を切つてゐた。朝晩の食堂にも『武士』のにほひが鼻をつく。晝の討論にも『藩』の息吹が立てこもる。とにかく、日常外出の時は帶刀、教室内でも小刀を挾んでゐた。數學は式を書くことから計算まですべて日本紙に毛筆、竹製のブン廻しに定規でやつてゐた。外國人が、學生に小言でもいふ時には『何をッ！』といはぬばかりに腰の小刀を引抜き、教師が愕然として口をつぐむと、さて徐ろに鉛筆を削つて鞘にをさめるといふ風であつた。

最初の學校騒動

一ッ橋から本郷の現在の場所に移轉して間もなく、時は明治十六年十月二十七日の東京大學卒業式の當日だ。在學生一同は上野公園で秋季運動會を行ひ、歸途日暮里の原で酒宴

を催し、夕刻寄宿舍に戻つて來た。そして賄方に『サア飯だ、早く出せ』と怒鳴つたが『今日の午後は運動會だから夕飯はいるまい』と思つてゐたので、飯の準備がなかつた。そこで賄征伐だ！　學生は食堂を叩き潰すばかりの亂暴狼藉！　そして手に手に棍棒を提げて教室に暴れこみ、ガラス窓を叩き破り、ハメ板を剝がし、机やテーブルを叩き壞し、時の綜理加藤弘之をはじめ、幹部は部屋から一歩も外に出ることが出來なかつた。

この暴行生は、すべて百四十七名、奥田義人（後に文相故人）を筆頭に、三上參次（現文學博士東大名譽教授）松方幸次郎（前川崎造船社長）平沼騏一郎（現樞密院副議長）山口鋭之助（現宮中顧問官）有賀長文（現三井重役）志立鐵次郎（後に實業家）萩野由之（故文學博士）日置益（後に支那公使）等々の顔觸れだ。この時の加藤綜理の心痛たらなかつた。それは、これが單純な賄征伐ではなく、穗積陳重博士の話では大學幹部の處置に憤懣をいだいてゐたのが勃發したといふのだからだ。加藤綜理以下の幹部は鳩首熟議し、その結果涙をふるつて百四十七名を退學處分に附してしまつた。そして退學者は、全國何處の學校へも入學せしめ得ない命令を文部省に出さしめた。この處分令は、當時の民權思想家

尾崎行雄氏をはじめ、一般社會をも、あまりに過酷だといふので憤激せしめたものだつたが、いづくんぞ知らん、これこそ、他日再び復校せしめん深い思ひやりであつたのだ。奥田義人以下百四十七名の學生が、めでたく復校したことは、勿論その後間もなくであつた。これが、東大としての最初の學校騒動で、今日流行のストライキの元祖でもあらうか？

角帽の起原

角帽の由來が愉快だ。昔とはいへ學生の遊里に通ふものが多く、卒業間際に放校處分を受ける學生などもゐた。從つて、一方には同志會などが組織され校風改善の運動も起つて來たのだが、學生墮落防止策の一方法として、正服正帽を一定しては、といふ議が大學生及び豫備門生の間に起つた。しかし、當時の學生は殆ど全部和服だつたので、資力の點で實行出來ない。せめて帽子だけでも一定したいといふので、日を期して帽子の型を有志から立案せしめたのだ。理科大學生和田義睦の案といふのが全會一致で採用され、その時代の三越格たる大倉組に幾度か見本を試作させ、やがて出來上つたものが、今日見る角帽だ

つた。實に明治十七年十月のこと。此の角帽がやがて大學生の代名詞となり、全國の子女憧憬の對象となつたことを思へば、何と罪深く感慨深き創案であることよ。

特權の發生

明治二十二年二月十二日、つまり憲法發布の翌日、兩陛下が上野公園に行幸啓あらせられた日、帝大學生は憲法制定者としての伊藤博文氏を牛車に乘せて、エンヤラヤと綱をつけて引つぱりたいと申出た。もちろん否決されたが、この學生の提案には、他にかくれた原因があつた。伊藤内閣では文官試驗規則を發布し、帝國大學の法科文科卒業生に限り、無試驗で、高等文官試補に任用せられる條文を設け、「卒業試驗評點平均八十五點以上は年俸五百五十圓、六十五點以上七十九點迄は五百圓、落第點以上六十五點までは四百五十圓を給與す」といふ訓令まで下したのだ。だから學士樣となれば、立派な官員樣になれるといふ特典が、こゝに生れた。この特典を大學に與へた恩人こそ伊藤博文であつたから、牛車の禮を申し出たのだつた。

この文官任用令の餘弊は、今日の學生にまでもなほ支配力を失はない點取主義を植ゑつけた。成績點數で月給が違ふのであるから、かうなるのもやむを得ない。また、これと同時に、帝大萬能の思想をも、深く〳〵社會に浸透させてしまつた。

しかし、間もなく明治二十七年の卒業生からは、高文試驗にパスしなければ行政官になれなくなつた。その頃の大學生の失望つたらなかつたものだ。時の總長濱尾新氏は、深く怨まれた。だが、これは怨む方が無理なのでやはり仕方なく學生は大學を優等で卒業し、高文にもよい成績でパスするやう、一意專心勉學に耽つたのだつた。

この頃から以後、赤門は官吏養成場として、また官學の牙城として、その面目はいよ〳〵發揮された。青雲の志をいだいて、こゝに集ふ全國の秀才、彼等の間に猛烈な爭覇戰が展開された。しかもそれを一層助長したものは、光榮に輝やく恩賜の銀時計であつた。

銀時計時代

銀時計の制度の生れたのは、明治三十二年からであつたが、この名譽に浴し得るものは

即ち全國秀才中のナンバーワンだ。スポーツでいへば優勝牌の受領者だ。今年の銀時計組は誰々だ、と都下の新聞紙は筆を揃へて、その豫想記事さへ書き立てるので、學生たるものは死もの狂ひだ。『學士樣なら娘をやろか』の時代であつたとはいへ、その學士樣でも銀時計組なら飛切り上等だ。權門富家の令嬢はもちろん、立身出世は思ひのまゝ、官吏となつても、實業界に出ても、トン〳〵拍子に昇進する。まことやこれ『秀才華やかなりし頃』の出現であつた。

われらは、此の時代の秀才として、明治三十六年の小川鄕太郎（現代議士法學博士）、三十七年の井上通夫（醫學博士東大教授）、三十九年の木村鋭市（現滿鐵筆頭理事）、四十年阿部次郎（東北帝大教授）、二上兵治（樞密院書記官長）、四十一年の鳩山秀夫（法學博士辯護士）、穗積重遠（法學博士東大教授）、緒方知三郎（醫學博士東大教授）、四十二年の堀切善次郎（前東京市長內閣書記官長）、青木得三（元大藏省主稅局長）、下條康麿（賞勳局總裁）、宇井伯壽（文學博士東大教授）、四十三年の渡邊鐵藏（東京商業會議所書記長法學博士）、鶴見祐輔（前代議士）、佐々廉平（醫學博士）、四十五年の津島壽一（財務官）末弘嚴太郎（法學博士

東大法學部長）大正二年の吉野信次（商工次官）等々を記憶してゐる。

この銀時計時代の產物として『松・櫻・蓮』といふ赤門の座訓がある。年改まつて門松の立つ頃にノートの第一頁を繰る學生は銀時計組、櫻の梢に蕾のふくらむのを見てノートを展げた學生は及第組、不忍池に白蓮紅蓮の夢破る音に慌だしくノートを取り出した者は落第組と相場が決つてゐた。かくして赤門の學生は、松漬、櫻漬、蓮漬として、市場に送り出されるのであつた。

しかも、そのノートたるや『一ノート三十年』の言葉があつたやうに、教授の或る者は昔ながらの古ノートの朗讀を始めるや、學生達は一字一句をも書き落すまいと、一心にペンを走らせるのだつた。毎年々々同じ內容の講義をし、そしてそのノートは、教授が恩給年限に達する頃には、摩れ切れてボロ〳〵になつてゐる。

だが、かうした皮肉も、當時にあつては問題ではなかつたのだ。講壇の學者は『帝大教授』の肩書きに學界最上の地位と名譽とを誇り、壇下の學生は『赤門の秀才』の名に前途の榮達に醉うてゐたのだ。日淸・日露の兩役を經て極度に昂揚された國家主義の雰圍氣の

中にあつて、また、その國家主義の樞軸として展開した官僚政治の繁榮の下にあつては、官學の牙城東京帝大は、特權の甘夢に陷沒してゐたのだつた。そして社會もまたそれを許してゐたのだつた。だが、時が來た。その甘夢の打ち破らるべき日が！

新らしき時代へ

東方の眠り久しき國の子等
今燦爛の新たなる
光明に覺む嬉しからずや
閥族と阿權と利己と曲學の
力合せて塞ぎたる
世界思潮の濤ほとばしる
世は移り時は過ぎゆく何時までか
意氣の青年閥族の

奴隷となりて身をばせむべき
閥族の垣とよばれし不祥の名
今ぞ雪がん赤門の
健兒の意氣を人々よ見よ

これは『青年の意氣』と題した東大の學生歌だ。文學士木村久一氏作歌、弘田龍太郎氏の作曲で、大正の初め頃に歌はれたものだ。デモクラシーの歌だ。

官學の牙城、閥族の搖籃といふ香ばしからぬ名に、時代に眼さめた兒等は、いつまでも陶醉してゐることは出來なかつたのだ。見よ世界思潮の波は、いち早く最高學府にひたひたと寄せてゐるではないか。

歐洲大戰の後に、全世界を風靡したデモクラシーの思想は、まづ時の帝大教授吉野作造博士によつて口火を切られた。警鐘は亂打された。新らしき明日への思想は、熱風の如く波及する。

デモクラシーの歌と旗の下に集うた學生らは、新人會を組織し『時代の兒』として社會

運動の嵐の中にとびこんだ。民衆の中へ！

あゝ、それは官學の久しき眠りから醒まされた力だ。大學を出れば高文から官吏への徑路を辿るこれまでの大學生活にあつては、確かに異常なる驚異であつた。

帝大の出身者鈴木文治は、友愛會を組織した。麻生久、棚橋小虎、山名義鶴、佐野學、赤松克麿、宮崎龍介、等々の赤門の新人は、擧つて勞働運動に身を投じた。時代に先驅する力が閥族の城をつき破つて來たのだつた。

次に襲ひ來つた大戰後の經濟恐慌と、大震災の打擊とは、一切をあげて平等のスタートに立たしめた。來た！　實力本位の時代が！

エピローグ

新らしい時代の風潮は、東大のみの特權を剝ぎ奪つてゆく。官學の牙城として傳統を誇つてゐた時代は去つた。今や、震災復興による豪華にして壯麗な學の殿堂成つて、しかも『大學の沒落』はその內部から洩れて來るのだ。新興日本の文化の脊柱となつた過去の誇り

は、今まさに失はれんとしてゐるのであらうか？　また、この文化の脊柱は、ポッキリと眞ん中から折れてしまつたのであらうか？

否、否！　一時の沈滯と、混亂とはあつた。だが、大局より見る時、なほ、それは自己の胎内から新らしいものを生まんとする陣痛に外ならなかつたのだ。『大學の沒落！』此の流行的な呼び聲は、東大において最も喧ましい。だが、次の時代を拓り開くべき力も亦、この大學を中心として、今日現に育くまれつゝあるではなからうか？　時代が行詰る時は大學も行詰る。が、行詰つた時代を、光明の彼岸に向つて打開する力はまた、必ず大學の内から生れ出るのだ。

何となれば、大學こそ青年學徒の集ふところだ。社會文化の指導的勢力の搖籃となるところだ。常に若い、そして、絶えず時代の尖端に立つ。『赤門！』封建の昔を偲ぶその名は古い。だが、その古き名の彼方に、世界的大學として脈搏つ若々しいスピリットの波動を、何人が否定出來よう！　見よ。新時代の英雄が、人材が、科學者が、續々とこの學府から生れ出でつゝあるではないか。それが東京帝大のもつ永遠の強味だ。

京都帝大の勢力網

西日本の覇王

地を抜くこと、まさに百二十尺、洛東吉田山の翠綠をバックに、明るい樺色に聳り立つ四角の高塔、これなん東洋一と京大が誇る大時計臺だ。京大を追はれた河上肇博士も、去つた當時は『僕は大學こそ追はれたが、僕の書齋からは、あのなつかしい時計臺が一目で見える』と名殘り惜し氣に述懷したものだつた。

この時計臺が、大學の顚落を象徵する象牙の塔であるか、無いか、それは說く人々にまかせよう。しかし、近代的な最高最鋭の設備と、機械美とをもつて、京の中空に突つ立つた雄姿こそは、新らしい京大の躍進的な姿そのまゝではなからうか？

東大といへば京大、前者が帝都各大學中に冠絕して全日本に號令せんとすれば、どつこ

い、さうはさせじと京大は西日本を自己の掌中にをさめて、これに對峙せんとする。天下を兩分して、その各々を代表する東西兩大學の爭覇戰ほど、大學ファンにとつて血を湧かす觀物はない。

が、時しもあれ、大阪に出現した新帝大の誕生！　これこそ、京大の背後から、その覇權を脅かすものではないか、と。どういたしまして！　ローマは一日にして成らずだ。たとひ、大阪帝大が、學界の大先輩長岡半太郎博士を總長に推し戴き、その傘下に天下の人材を網羅して、豊富な財力を關西富豪に仰がうとも、京都帝大が西日本一帶に植ゑつけた勢力の量と質とには、容易に壘を摩し難いものがあるのである。

そも〳〵京大の生れ出たのは明治三十年、その以前から關西の地に一大學を設立することは、明治政府の重要な政策の一つだつたが、それが具體化したのが明治二十九年で、京都出身の西園寺公が文部大臣時代だつた。初めは法科大學、醫科大學、理工科大學の三大學であつたが、今日では法經文理醫工農の七學部から成る綜合大學だ。新總長松井元興博士以下、五百の教職員と、五千の學生、一萬數千の出身者とを包容する、世界第一流の大

學となり、東大と共に新興日本が誇るべき最高學府にまで發展した。試みに朝鮮や臺灣の演習林を合すれば京大の總面積は、十八方里の大京都の數倍に餘るといふことだ。だが、まあ、かういふ子供らしい自慢は默殺するとして、京大創立以來三十年、その急激なる發展史を裏づけるものは、春は櫻かざして唄ふ大宮人の京都にふさはしからぬ進擊苦鬪の連綴にあると思はねばならぬ。といふのは外でもない。明治日本の各分野を獨占した東大學閥の專横に對する不平黨の憤懣は、期せずして京大の誕生によつて、その活躍舞臺への門戸開放を發見せしめたからだ。京大建學の當初から『東大打つべし』の氣魄と熱とが、横溢してゐたのである。その古豪の王座に肉薄せんとする絶えざる努力と奮進こそ、凝つては此處に東大に對立拮抗し得る京大王國を完成し得たのだ。

京大王國の勢力網——それは、東大に對する獰猛な挑戰的競爭と、その血腦をしぼる爭覇戰上に伸び擴げられていつたことを忘れてはならぬ。

法學部今昔二重奏

京大といへば、直ちに浮び來るのが京大法科である。いつも法科が他科よりも先頭を切り、何か問題が起る毎に、法科教授が眞つ先きに堂々の意見を立てて、運動のトップを切れば、他科はこれに追隨するのがお定まりだつたからである。それも道理、『東大を凌ぐ』といふ京大建學の精神は、何よりも先づ法科の充實に力を集注せしめたからだ。快傑岡松參太郎博士を中心として京大に馳せ參じた新進氣鋭の法學者の顔觸れは、井上密、巖谷孫藏、千賀鶴太郎、高根義人、田島錦治、仁井田益太郎、仁保龜松、春木一郎、岡村司、織田萬、勝本勘三郎、新渡戸稻造、末廣重雄、少し若手には、雉本朗造、毛戸勝元、中島玉吉、戸田海市、石坂音四郎、神戸正雄、市村光惠など、どれを見ても專門の學殖と、鼻つ柱の強さにおいて一騎當千の猛者ばかりだつた。

その連中は、當時の東大法科に恐るべき勢威を張つて全法學界に君臨してゐた穗積陳重、同八束博士兄弟の專制王國に容れられず、不平を抑へながら、ひたすら研學への沒頭によつて鬱を忘れるほかない逆境にあつた。その時、京大の誕生は、蛟龍が雲を得た、ともいへよう。彼等は衝天の意氣で、洛陽の山川をどよもしながら、多年の鬱積を吐き出したも

のだ。京大法科の聲名、揚らざらんとするも得べけんやである。

何しろ法科のキャプテンたる岡松參太郎博士は、一世に著聞した酒豪だ。それも自宅でチビ〳〵やるのでなく、高樓に花の如く美妓を侍らせて盛に大杯を傾ける流儀だ。博士は口癖に『酒の飲めない奴は、大學教授たる資格なし』といつて、毎日、太陽が西山に傾くと法科の研究室から腕車が連なつて走り出す。先頭はいつも岡松博士だ。東山三十六峰翠黛の眉を左手に睨みながら、腕車の行手は、いはずと知れた祇園街。

——往年の京大教授は、かくてよく飲み、またよく勉強した。紅燈翠帳のかげで、學位論文の骨組みをこさへた先生が少くない。岡松博士にしてからが、精彩陸離、民法學者として梅、穗積、富井三大博士の壘を摩する慨があつたものだ。確かに、飲む一方に、よく勉強した。岡松博士の主唱で、臺灣の舊慣調査にまで、京大教授總動員で出かけたこともある。その頃、文部省から岡田良平氏が、京大總長となつて天降り、授業を視るつもりで、岡村司教授の教室へ入ると、講義中の岡村博士が、ハタと岡田總長を睨めて『こゝは俗吏の來る所ちやない』と一聲大喝したなんて元氣な話もある。

岡田良平總長も、結局、法科教授から追はれた形になつたが、後に澤柳政太郎博士が總長となるや、法科教授は連袂辭表をつきつけて、大喧嘩の末に澤柳總長を追放し、盛大な祝杯をあげたことは、世の知る通りだ。

とにかく京大法科が、對外的に京大全部を代表するまでに躍進また躍進、對內的にも各科の首座に位したのは、その意氣と學問的實力から來る當然の歸結であつた。そしてこれは、經濟學部の分立の頃までつゞいた。

ところで、今日の京大法學部の陣容は如何？

こゝに當然問題となるのは、學界未曾有の事件、瀧川教授問題である。同氏が中央大學に於ける講演に端を發し遂には政治問題となり、教授、助教授、講師以下二十餘名にも及ぶ免官者を出し、實質上法學部は潰滅にも等しい狀態となつた。しかし、こゝでは事件の解剖を目的とするのではないから、問題を再檢討する必要はないし、また、未だ整はざる新陣容の批判もさし控へよう。だが渦中に在つた人物を見る便宜として事件當時の陣容は一瞥の價値があると思ふ。

學部長の宮本英雄教授は英法學者として中堅どころのちやき〳〵だ。前學部長の烏賀陽然良博士は、海法にかけても押しも押されもせぬ學究。元老としての佐々木惣一博士は憲法界の大御所で、東大の美濃部博士と對照される人物。その他末廣重雄博士の國際法等いづれも京大法學部の存在を主張し得べき異色あるものだ。また、少壯の森口繁治博士の比例代表法、末川博教授のロシア民法、宮本英脩教授の愛の刑法、問題の當主瀧川幸辰教授の新らしき刑法學、さては故芥川龍之介をして『我れ彼れに及ばざること遠し』の嘆を發せしめた恒藤恭教授の法理學等々新進の逸材俊豪が大家として成熟し來るの日こそ名實ともに東大を凌ぐものとして期待されたのだが、問題の發生と共に最も强硬派として當局に對抗したこれらの諸教授はすべて京大法學部から追はれるに至つた。

經濟學部の新陣容

では、經濟學部は如何？

マルクス學の最高峰河上肇博士が教授でゐた頃は、京大全體が赤いやうに思はれ、經濟

學部學生の賣れ行きに差支へたといふ話であるが、河上博士が追放され、比較的進歩的な河田嗣郎博士が年俸一萬數千圓で大阪商大學長に聘せられてからは殆ど穩健な學者ばかりで、漸次實業界方面の信用を恢復しつゝあるといふことだ。前學部長の小島昌太郎博士は溫厚な中堅教授、學生の就職には骨身を惜しまず奔走する。元老組には財部靜治博士の統計學、學部長山本美越乃博士の殖民政策、神戸正雄博士の社會政策等々、いづれも世既に定評のあるものであるが、スターは京大出身の高田保馬博士の經濟原論だ。高田博士は人も知る社會學の泰斗で文學博士、しかも經濟學の造詣深く、今や九大と兼任で、反マルクス學派の闘將として、花々しい論壇の寵兒であることは、今更說くまでもない。

同じ京大出身の本庄榮治郎博士の日本經濟史、汐見三郎博士の財政學等々は、京大經濟學部の人氣を背負ふものである。その他、作田莊一、谷口吉彥、石川興二等々の少壯教授連も囑望するに足り、人材には事缺かない。

が、たゞ一つ、京大の法經兩學部の出身者の勢力のみは、東大の堅壘には齒が立たない憾みがある。その創立が二十數年東大に先んじられてゐる京大としては無理からぬことだ

が、特に東大系に非ずんば人に非ずの觀がある官僚組織では、京大が突擊又突擊、その一角に食ひこまんとする努力には久しいものがあるが、如何にせん、京大出身の政界人としては、大道良太、山崎達之輔、近衛文麿公以外に、他に傑出したものを見ない。ひとり京大、九大等には佐々木惣一博士以下多數の京大出身教授を擁出してゐることはいさゝか意を强うするに足りる。それに、も一つ、大阪の二大新聞たる大阪朝日に村山長擧、高原操の兩重役を、大阪毎日に城戸元亮重役を送つてゐることは、京大の大なる誇りでもあらう。

醫界を兩斷する京大醫學部

今日、おびたゞしい醫學博士を、日本醫界の全線に放射する京大醫學部の平面的勢力の偉大さは明瞭であるが、その立體的勢力においても、京大は東の大本山たる東大に對して遜色はない。すなはち、學部長戸田正三博士の衛生學に於ける、辻寛治教授の內分泌における、松尾巖教授の膽石病研究における、眞下俊一教授の心臟における、鳥潟隆三教授の煮沸沈澱元における、清野謙次教授の生體染色における、岡林秀一教授の子宮癌における、

星野教授の前庭迷路における、松本信一教授の實驗梅毒における、等々（あげればまだいくらもある）の研究は、いづれも獨創斬新、質量共に他の追隨を許さず、京大醫學部をして、西の大本山たらしむるに充分だ。のみならず、日本の醫學をして世界第一流の水準にまで進出せしめた動力の主要な一部をなしたものでさへあるのだ。

元來、醫學部も、法學部と同樣、創業當初の指導精神は『東大に負けるもんか、勝つ、凌ぐ』の一點に凝結してゐた。だから、當時東大の青山胤通博士に對立して『青山王國何ものぞ』と高く自負してゐた外科學界の傑物猪子止戈之助博士が京大醫科創立委員長として荒木寅三郎博士らと新王國の建設に取りかかり、東大醫科獨占の日本醫學界を東西に兩斷しようと試みた。その氣魄と熱と努力とは、着々效を奏して、東大系で固めてゐた全國の主要病院や醫學校は、朝に一城、夕に一城式に京大系の蠶食するところとなり、早くも創業十年にして京大醫科は東大醫科にとつて恐るべき一大敵國として出現した。三十年を閲する今日では、完全に天下を兩分して、その一を保つてゐる實勢力を築き上げてゐる。西日本における主要な病院といふ病院は、殆ど京大系の固めるところであり、學校方面で

は、現に京都府立醫大の淺山學長、長崎醫大の林學長、岡山醫大の戸谷學長、奉天醫大の稲葉學長、京城醫專の佐藏校長等が京大出身たることによつても、およそ京大勢力の現勢圖が想像されよう。この間亡くなつた醫學界の最大巨星北里男が、慶應大學に醫學部を創設するに當つても、不減衰傳道學說で有名な加藤元一博士をはじめ、その人材を殆ど京大系から引つこ抜いた如き、東大の鼻先きに京大の精鋭が進出して店開きした觀がないでもない。

かくして、京大は昭和六年までに醫學士を產むこと二千百二十二人、醫學博士の生產千二百餘人の多數と共に、あたかも魚卵の如く全國醫界、殊に西日本にバラ撒いてゐるのだから、京大醫學部の勢威また旺んなるかなだ！

東大を凌ぐ文學部

日本の東洋史學界では一代の碩學といふにふさはしい內藤湖南博士や故桑原隲藏博士、それに支那文學が專門であつたが歷史にかけても專門家に讓らなかつた狩野直喜博士等の

存在によつて、京大の文學部が、久しく斯界の覇を唱へたものであるが、それらの逝去が相次いで名譽教授となつて現役から退いてからも、西域學に學部長の羽田亨博士等があつて、光輝ある王座を守つてゐる。

東洋史學と共に、哲學も亦、京大の誇りである。

『善の研究』で一世の青年を惹つけた西田幾多郎博士は停年で引退したとはいへ、高弟田邊元博士があつて深遠無比な數理哲學を講じ、また山内得立教授あつて新らしき現象學を唱導し、東大の沈滯に比して一歩を先んじてゐることは否定出來ない。その他考古學の濱田耕作博士（前文學部長）等々の權威を網羅してゐることは、何といふ心強さであらう。

出身者網をくりひろげてみても、歴史の新らしい劃に、京大文學部の勢力侮るべからざるものがある。現に京大兼九大教授の高田保馬博士や、老子研究の第一人者東北帝大の武内義雄博士、京城帝大の赤松智城博士、東京文理大の樽崎淺太郎、田中寛一の兩博士、廣島文理大の勝部謙造博士、東北帝大の篠原助市、千葉胤成の兩博士等々、京大學派の哲學界進出はめざましい。

變り種では、音樂研究のエキスパートとして隱れなき兼常清佐博士があり、また浪人學者の土田杏村氏がある。土田氏は未だ曾つて定職に就かず、京洛の地に蟠踞して東西の論客と矛を交へつゝ、土田哲學の旗を高く揭げて、新日本の思想的指導者を以て自任してゐる姿は、天晴勇壯なりと讃めておかう。新人では法政大學の人氣教授谷川徹三氏や三木清氏らも、この出身だ。史學科からは、第一期出身（明治四十三年）の西田直二郎博士を筆頭に、國史の中村直勝、支那史の那波利貞、地理學の小牧實繁の京大少壯助教授や、廣島文理大の清原貞雄博士も史學科の出身だ。たゞ文學方面には、どうしたものか人材に乏しい。東北帝大の支那文學の權威青木正兒博士、などがめぼしい方だが、何といつても文壇の大御所菊池寛氏をこゝから出したことは、京大の大きな誇りでなくてはならぬ。とはいふものの、プロレタリヤ文藝陣には、一人として有爲な闘士を、京大が送り出さないのはどうしたものか？

精鋭を誇る理學部

現理學部長は、生物學の權威川村多實二氏だ。物理學の木村正路、玉城嘉十郎、石野又吉の三博士、宇宙物理學の山本一清博士、地球物理學の志田順博士、數學界の明星西內貞吉博士、駒井卓博士等々の堂々たる顔觸れを見よ。だが、その自慢の一つは京大が理學部を中心に化學研究に力瘤を入れてゐることだ。

試みに、化學に關係ある學者を拾ひ上げて見よう。化學教室には名譽教授近重眞澄博士の後繼者金相學の宇野傳三博士を筆頭に、無機化學の佐々木申二博士、有機化學の堀場信吉博士、生物化學の小松茂博士の四博士がズラリと顔をならべ、お隣の工學部では工業化學教室に中澤良夫、吉岡藤作、喜多源逸、宮田道雄の四教授があり、農學部には農藝化學の大杉繁、鈴木文助、榮養化學の近藤金助、林產化學の志方益三の四博士がある。しかも京大には大規模な化學研究所を大阪府下高槻にもち、喜多博士を所長に理・工・農・醫の各學部教授が研究員として參加してゐる。

研究所で思ひついたが、京大は西日本一帶に亘つて研究機關をくり擴げてゐる。淡水生物研究の大津臨湖實驗所、鹽水生物研究の瀨戸臨海實驗所、九州別府の地球物理學研究所、

阿蘇の火山研究所、伏見桃山の花山天文臺、關西隨一と誇る攝津農場等々、これらの豊富な、そして秀れた業績についてみるがいゝ。理學部を中心とする新設大阪帝大と雖も、京大のレベルに接近するにはなほ前途遼遠を感じるだらう。

阪神を背景とした工學部

轉じて工學部を見よう。前學部長工業化學の權威松本均博士、大塚要博士、青柳榮司博士などを名譽教授に送つたがなほ採鑛冶金の渡邊俊雄博士あり、わけても、京大工學部といへば直ちに念頭に泛ぶのは、俗界と最も交渉の深い建築學教室の御歴々だ。天沼俊一、平野正雄、の諸博士がゐる。醫學の臨床醫學の人々が、病院を經營したり內職稼ぎをして、時々金儲けに沒頭しすぎると非難されてゐるが、建築學の教授は、進んで俗界と交渉し、設計や監督をやるのが唯一の實驗であるんだから、關西の大建築で京大の御厄介になつてゐないものがないのも當然だ。ひとり建築界のみでなく阪神のモダン商工都市の發達に、京大工學部の占むる勢力の素晴らしさは想像されよう。

大陸にのびる農學部

一口に農學部の教授と聞けば、大抵の人は直ちにお百姓の姿を聯想して『土』と『肥し』の匂ひさへ感じるであらう。だが、事實はまるで反對だ。少くとも京大農學部にあつては、その歴史の新らしい如く、教授も若くてモダンな紳士揃ひときてゐる。まづ農政經濟の橋本左衛門博士が名前と正反對にダン然シックな紳士だし農民經濟史の黒正巖博士の如きはヒットラー主義を掲げて代議士にでもならうといふ新人だ。『かび』の研究で名高い逸見武雄博士や京大最年少の教授で醗酵生理學の片桐英郎博士、農林化學の大杉繁博士(學部長)、林學の市川三祿博士等々、いづれ劣らぬモダンボーイだ。が、白き手の農學實習者を想像してはいけない。市河博士の如きは、學生時代から大のスポーツマン、そのハチ切れるやうな精力で、伸びゆく農學部を育て上げようとしてゐる。札幌農大、東京駒場の農學部によつて獨占されてゐた天下に割りこんで、西日本から朝鮮、大陸方面に觸手をのばす進出ぶりは、確かに京大傳統の意氣と熱とを見ることが出來る。

關西文化の心臓

以上を通觀して感じることは、居眠りしてゐるやうな京都の風物とは、似もつかぬ清新活潑な異色ある學風を、京大が特色としてゐることだ。東大に拮抗して、そのカビ臭い古い學説をコッピドク打ち壊はさうとする進擊的な研究熱、それに地理の關係もあつて、政府の顔色や鼻息を窺はない奔放な生氣潑剌さ、それらは京大をして西日本の覇者たらしめたが、同時にまた帝都をはじめ全國の學府を刺戟して、わが學界に絶えず清新の氣を注入して來てゐた。今や大學の沒落が高唱され、京大の意氣にも、昔日の盛觀ありや否やを憂へしむるが、ともあれ春風秋雨三十餘年誰が何といつても京大は、關西における學の淵叢たりし歴史を無視することは出來ない。大きくいへば西日本文化の發祥地、少くとも關西インテリ層にとつては、その心の故郷に違ひない。

早稲田大學物語

民衆の早稲田

都の西北、早稲田の森に、聳ゆる甍はわれらが母校
われらが日頃の抱負を知るや
進取の精神、學の獨立、現世を忘れぬ久遠の理想
輝やくわれらが行手を見よや
わせだ！　わせだ！　わせだ！
わせだ！　わせだ！　わせだ！　わせだ！
全國津々浦々、此の校歌の鳴り響かぬところはない。わせだ！　わせだ！　早稲田大學の學生たると、出身者たるとに論なく、限りない親しみの情を以て此の歌に共感する。興

至ればおのづから高らかに和して歌ふではないか。まして、早慶戰の日など、あのラジオの擴聲器の前に、眞黒に集つた群集が、大波のうねりのやうな響で傳つて來る此の早稲田の歌を聞くとき、いかに高潮した感激を以て、萬雷の拍手を送ることか。

早稲田には、まつたく他のいづれの大學にも見られない一種特別の親しみを、民衆の間に見出すのである。それは此の校歌の響きと共に、年一年と津々浦々に波及し、そして反響する。——早稲田は、今や、全國民の所有である。

早稲田大學は、その建學の精神において、官僚の養成所だつた帝國大學に拮抗し、その學風において好敵手慶應義塾大學と對立する。そして、特に早稲田にのみ全國民の親愛が集中される理由は、創立者大隈重信侯に對する民衆の人氣も考へられるが、主として此の帝大にも、慶應にも見出し得ない「民衆の中へ」の傳統的精神に基づくものであると思はれる。

されば——と開き直るのもをかしいが、こゝに早稲田大學評判記を書くに當つては、まづその建學の當初に溯つてみなければなるまい。

東京專門學校時代

明治七年の民選議院建白以來、時代は一世の懸案であつた國會開設に向つてその全力を傾注し、明治廿三年の國會開設までは、動搖止むことなき政論の怒濤旋風時代であつた。

わが早稲田大學は、その嵐の咆哮の中に孤々の聲をあげたのである。即ち明治十四年の政變によつて、野に下つた參議大隈重信は、板垣退助の自由黨に對して改進黨を起し、藩閥政治に向つて共同の戰陣を布くと共に、廣く天下に同志を見出すため、東京專門學校を早稲田の森に開いたのであつた。當時、大隈參議と共に下野した小野梓は、會計檢査院の重職にあつたが、榮職を一擲して、大隈侯を援けて學校創立の局に當つた人物である。

彼は當時の新知識の一人で、見るからに機鋒鋭利、一世の才傑であつたが、帝大、慶應義塾の學生を糾合して歐渡會を組織し、藩閥政治攻擊の急先鋒となつてゐた。この頃帝大の政治科に在學中の高田早苗、天野爲之、山田一郎、砂川雄峻等有爲の青年は、その傘下に參じて、一意邦家のために盡さうと誓つたものである。かくて、大隈侯の下に小野梓氏

が東京專門學校を設立するや、高田早苗、天野爲之等は直ちに教授として早稲田の人となり、山田一郎、砂川雄峻、尾崎行雄等もまた講師として事業を援けたのであつた。

こゝに學問の獨立と、平民主義の政治教育を標榜する學校は誕生した。在朝の藩閥官僚に抗して『野に下る』悲壯なる決意の下に創立されたこの學校が、天下の學徒から歡迎せられない筈がない。大隈侯が年と共に民衆の間に植ゑつけていつた『人氣』は、即ちまた此の學校の『人氣』として、民衆の間に廣く深く根を下ろして行つた。やがて、文科が並設され、坪內逍遙、大西祝の兩氏が帝大から迎へられて文科の創業に盡瘁した。この前者が今のシエクスピーア研究の世界的權威たる逍遙博士であり、後者が明治哲學界の大立物大西操山博士であることは、今更說明するまでもないであらう。

明治三十五年に東京專門學校は早稲田大學と改稱し、明治三十七年商科を新らしく增設し、更に四十二年に理工科を加へ、大正九年には新大學令による綜合大學として出現したのである。

——そして、時は進んで昭和の今となる。

早稲田大學の現狀

今や總長田中穗積博士の下に指導される四百有餘名の教授、助教授、講師と、三百六十餘名の職員、それから約四萬に近い校友と、同じ理想の下に全國津々浦々から集ひ來つた一萬五千の在學生を包容し、その經常費年に二百萬圓を計上する大學園としての早稲田にまで發展した。

三萬坪の廣大な敷地に百有餘の建物と、他の大學に比較して頗る完備した運動場とをもつ早稲田！　われ〳〵は一通り此の學園の外觀と內容とを一瞥しようではないか？

大學正門を入つて、少し進むと今は美しい花園に變つてゐるが、往時幾度か學生大會の行はれた廣場がある。その廣場に面して赤い煉瓦の三階建は、長くも明治大帝の御下賜金を以て建てた恩賜館である。その前を通つて右に折れると、坪內博士記念の演劇博物館がある。坪內博士の存在は日本の誇であるが、また早稲田のごとなき誇であるのだ。博士多年の宿志であつた此の世界に類例なき博物館こそ、學園引退後の博士を永久に偲ぶ記念で

あらう。正門に戻つて左手には、東洋有數の大圖書館がある。その形態の優美さはどうだ。館內の諸設備の斬新さとその藏書の三十萬卷とは、實に早稲田が世界の一流大學と比較して遜色なき眞價を語る一面であらう。この圖書館と相呼應して大空高く聳ゆる大隈記念講堂の偉觀！　高塔から流れて來る壯嚴な自由の鐘！　この鐘は日本における最初の試みであつて、米國のベルチモアのマクシエン會社に特に注文して取寄せたものである。高らかに、朗らかに大空に鳴つて地上の學徒の耳を響くときそれは早稲田建學の精神を天に代つてささやくかのやうである。多感な早稲田學徒は、深い感激に血の高鳴りを覺えるのだ。

大隈講堂に近く大隈會館がある。また早稲田大學出版部がある。前者は元大隈侯の邸宅であつたが、老侯の沒後は大隈家から學校に寄附し、今では學生の散策する場所となつてゐる。春の暖かい日、秋の朗らかな空の下、芝生に寢ころんで彼等は涯しなき未來に思ひを馳せるのである。館內には大隈侯の居間、應接間等があり、毎年開催される各科の學生大會や校友大會などは、いづれもこゝを會場とするのだ。早稲田大學出版部は、大日本文明協會と共に、早大の兩翼を形成し、その大學社會化のために活動しつゝある有力な機關

であつて、殊に出版部から發行される通信講義錄は、直接早稲田に學び得ない全國何十萬かの青年に愛讀され、早稲田大學の大衆化に、いよ〳〵絶大なはたらきを演じつゝある。

建物から內容に移らう。大學部、專門部、高等師範部、第一第二早稲田高等學院、夜間敎授の專門學校、高等工學校、工手學校、早稲田實業學校、早稲田中學校、――これが所謂早稲田學園であるが大學部の政治經濟學部は、法律科と共に早稲田學園中最古の歷史をもち、或る意味で早稲田學園を代表してゐるものである。所謂早稲田氣質の最も濃厚な學部で、負けず嫌ひで、感激性に富み、加ふるに反逆的猪突性が强烈であるから、早大の學校騷動には、必ずその先頭に立つてゐる。雄辯會でも、新聞學會でも、少しでも熱のある分子は大槪この學部の學生といつてよい。曾つて起つた軍硏反對運動でも、まだ耳新らしい大山郁夫敎授留任運動でも、此の科の學生を中心とした運動であつた。從つて、學生にも俊秀は多く、また敎授にも粒選りの一流學者を網羅してゐる。金融貨幣銀行論の服部文四郎敎授をはじめ工業經濟の林癸未夫、經濟學史の二木保幾、政治學史の高橋淸吾、文明史の內ケ崎作三郎、政治哲學の五來欣造、東洋外交史の靑柳篤恒、經濟史の平沼淑郎、社

會學の杉森孝次郎、行政學の副島義一、國際公法の中村進午、政治學の浮田和民、財政學の阿部賢一等々の諸敎授が雲の如く控へてゐる。

商學部もまた新興早稲田を代表するものである。三井、三菱、古河等の大會社に、最近漸く根を張り始めたワセダニアンの活躍こそ社會の惑星として注目に價する。敎授に工場經營學の出井盛之、海運經濟の寺島成信博士等、錚々たる人物を配置し、他校の商學部に一敵國をなしてゐる。

文學部は、早稲田學園の誇りだ。文科では赤門か稲門かと稱せられるほどで、稲門文科の歷史は古く、また輝やかしい。三十年の歷史ある古い校舍を棄てゝ、モダン樣式の鐵筋コンクリートの校舍を落成した。その學生も自覺ある優秀な人物が多いが、敎授にも早稲田出身の文學者で以て固め、流石文壇早稲田王國の牙城たる偉容を示してゐる。上古文學の五十嵐力博士、心理學の金子馬治博士をはじめ、考古學の西村眞次、印度哲學の武田豐四郎、宗敎學の帆足理一郎、フランス文學の吉江喬松、江戸文學の山口剛、イギリス文學の日高只一、東洋哲學の津田左右吉、美術史の紀淑雄、東洋哲學史の遠藤隆吉博士、西洋

史の煙山專太郎、等々の顏觸を見たゞけでも、その內容の一班は察知せられるであらう。

更に理工學部に轉じよう。早稻田大學の前身たる東京專門學校の當初から、理科はおかれてゐたのであるが、それは間もなく廢止され、その後明治四十二年になつて完備した理工科が設けられた。早大の理工科は、主として工科に重きをおいてゐるのが特色である。從つて民衆の實際生活に觸れた發明や發見において、早大の理工科は甚だ多くを寄與してゐる。電氣工學の山本忠興博士と川原田政太郎博士との共同研究になるテレビジョンの發明は、世界學界を驚かすに足るものであつた。鑛物學の德永重康博士の秩父炭坑の發見の如き、また建築科の佐藤功一、內藤多仲諸氏の我國建築界における功績の如き、特筆すべきものが多い。その他、機械工學、應用化學等の研究にも、見るべきものが多い。所謂サイエンスの分野にあつて、早大の理工科は、慶應の醫學部と共に、私學の有する二大施設である。

その出身者網

さて、次にわれ〳〵は早稻田出身者の現有勢力を語らねばならない。

從來の官學的見地から見れば『最高學府』に學んだ者の第一の目的はまづ高等文官試驗をパスして官界に乘り出し、書記官から知事を經て、未來は內閣に列することにあつた。また、財界に雄飛して、大會社の重役として、上流社會の華やかな生活を享樂することにあつた。ところで、官界及び官學における帝大系勢力の壓倒的なことは、今更いふまでもない。又、財界における慶應閥の地位も、牢固として拔くべからざるものがある。

そこで、わが早稻田學徒の目指すところはいづれであつたらうか。曾つて五來欣造教授は『早稻田大學は政治道樂の產地である。そしてそれが如何に日本の勃興なるものに貢獻したかといふことは、議會に五十餘名の代議士を送り、殊に有數の闘士を產んだことで分り、また早稻田の校友が地方で政治的に活躍してゐるのを見ても明白である。そして早稻田のこの特色は、將來に於て、益々その度を增すが如き傾向を示してゐる』と言つた。

代議士に、そして大臣たれ——これは實に早稻田學徒の理想であつた。官僚となつて事務に蹈躇せず、會社員となつて小理想に滿足せず、野に立つて民衆に訴へ、民衆に立脚し

た政治家となつてかねて抱負を實現せんとするところにあつた。從つて、卒業後は、鄉國に歸つて府縣會議員に、それから國會議員に進出して政黨政治家たるにある。今日、いづれの市町村に行つても、早稲田出身の議員がゐないところはない。

が、それらはしばらく措き、われ〳〵が中央政界に眼を轉ずる時、現在內閣の諸大臣をはじめ、所謂大臣級の人物には帝大系の官僚出身が多數を占めてゐるが、次期の大臣級として天下の輿望を負うてゐるものは、殆ど早稲田出身者を以て占められてゐることにも驚かざるを得ないのである。即ち中野正剛氏、小山松壽氏、牧山耕藏氏、西村丹治郎氏、その他山田道兄、三木武吉、增田義一、山道襄一、田淵豐吉、田中萬逸、小山谷藏の諸氏等々の當代議士會の名士はいづれも早大出身である。大物では現拓務大臣永井柳太郎氏、今は物故したが民政黨の長老組の降旗元太郎氏があり、農林大臣や大藏大臣を歷任した早速整爾氏など、生え拔きの早稲田ッ兒であつた。大山郁夫氏をはじめ、稻村隆一、淺沼稻次郎、三宅正一、田所輝明等々の錚々たる無產黨闘士をも早大が送り出してゐることも天下周知の事實であらう。

政界における早稲田派は以上の如く多望な將來をもつてゐる。が、過去及び現在に最も勢力を有してゐるのは、實にデヤーナリズムの世界である。官界からも財界からも閉め出しを食つたものが驥足を展べるところは、それらと對立する文化的分野であることは言ふまでもない。文壇、思想界、操觚界における早稲田系人物の活躍ぶりこそ特筆すべきものであるのだ。

まづ、文壇には、華やかな早稲田派の全盛時代があつた。今日でも、早稲田派の勢力は、量的にみて他のすべての大學をも凌駕してゐる。早稲田派の文藝の、もつとも重要な特色は、即ち常に何らかの點で大衆と密接に結びついてゐることである。帝大派のアカデミズムや、慶大の都會的耽美主義などにそれは對立する。坪內逍遙博士が若し帝大の教授であつたなら、單に語句の註釋だけで生涯を終へ、あの活潑な民衆の中への劇運動などは起らなかつたであらうから。

かの島村抱月氏を中心として起された日本文藝史上における早稲田派の全盛期は、抱月氏の死後相馬御風氏の手に移り、御風氏の鄉里への引退によつて一先づ解體したが、その間

に輩出した早大系文士の顔觸れには正宗白鳥、中村星湖、宇野浩二、石丸梧平、加能作次郎、島村民藏、白鳥省吾、小川未明、廣津和郎、西條八十、谷崎精二、吉田絃二郎、生方敏郎、舟木重信、下村千秋をはじめ、三上於菟吉、細田民樹、江戸川亂步、宮島新三郎、木村毅、直木三十五氏、等々を擧げ得る。しかも、曾て、熾烈なる勢で文壇を席捲しつゝあつたプロリタリヤ文學運動の先驅者的役割をつとめた青野季吉氏を早稲田から出したことも新らしい意味で一つの誇りであらう。

次に思想界評論界に名のある人々を擧げれば、安部磯雄氏は京都の同志社の出身であるが、最近まで早大の教授であつたことは、同大學の社會に與へた影響の一方ならぬものを、我々は認めざるを得ないのである。また、デモクラシー運動の尖端に立つて指導的役割をなした大山郁夫、杉森孝次郎氏や、現在無產戰線の理論家として令名ある猪俣津南雄、鈴木茂三郎氏や、經濟學界の論客を以て鳴る高橋龜吉氏などは生え抜きの早稲田人である。

その他馬場恒吾、千葉龜雄、北岭吉、白柳秀湖、高須梅溪の諸氏がある。

更に移つて新聞界に入らう。これまで輿論といふ形式で、官僚閥に對する一大敵國を形

づくつてゐた新聞界における早稲田派の勢力は、まつたく壓倒的であつた。就職難と共に、帝大その他の學校出身者が、押すな〳〵の勢で新聞社に職を求める者が激增しつゝあるが、早くから此の方面に多くの優秀な先輩を送り出してゐる早稲田派の勢力は、今なほ牢固として拔くべくもない。

例へば、現在の二大新聞閥といはれる兩朝日新聞と大每東日とを見ても、その幹部は早稲田系が絕對多數を占めてゐる。『朝日』でいへば東京朝日の方では編輯局長緒方竹虎氏をはじめ、編輯總務美土路昌一氏、編輯顧問經濟學博士牧野輝智氏や野村秀雄（前政治部長）石川六郎（校閲部長）土岐善麿（調査部長）坂崎坦（學藝部長）小高吉三郎（運動部長）の諸氏が現に最高幹部として控へてをり、『東京日日』でいへば、岡崎鴻吉（大每主幹）千葉龜雄（編輯顧問）川邊眞藏（論說委員）阿部賢一（論說委員經濟學博士）弓館芳夫（校正部長）その外早大出身者五十數氏が編輯各部の要職に就いてゐるのである。

其他『大阪朝日』の編輯總務原田讓二等の第一流の人士を拾ひ上げたゞけでも相當の數に上るのであるから、『新聞年鑑』によつて全國的に地方新聞までを算へ立てたら、大變な數

となるであらう。少くとも早稲田出身者の經營する新聞社のみでも六十を越えてゐるので、地方新聞の殆どすべてが、その編輯局に早稲田出身者を以て活動せしめてゐるのである。

單に新聞界だけでなく、雜誌、出版等の一般ヂヤーナリズムを通じて、到る處で早稲田系の人々が著しく進出し活躍しつゝある。實業之日本社には社長增田義一氏をはじめ重役から平社員に至るまで早大出身者で固められ、中央公論社また社長島中雄作氏を筆頭に二三の社員を除く外は早大出身者ばかりである。その他各種の出版事業に從事してゐる人々の過半數は早稲田系であるといつても差支へないであらう。全くこれまでの早稲田の政治經濟科や文科、商科は總括してヂヤーナリストを養成するための機關であつたかの如く見える位である。かくの如く早稲田が此の分野で優勢である事實は、建學の精神たる『民衆の中へ』の現はれであり、早稲田大學本來の面目であるともいへるのである。

『民衆の中へ』――早稲田はこの精神によつて創立され、この精神によつて發展した。今や完全に、それは民衆の中にある。全民衆の中に根を下ろし、大きく枝を伸ばしてゐる。さうである限り、早稲田大學は永久に榮えるであらう。

慶應大學氣質

時代の寵兒慶應

アメリカの花形大學といへば、誰しも思ひ浮べるハーバートとエール――この二大學の旗の色が、前者の海老茶に對して後者が濃紺だ。我がニッポンの花形大學早稲田と慶應との旗の色が、また同じ海老茶對濃紺で、米國と一致してゐるのが愉快だ。スタンドを埋めて『都の西北』の校歌の響くところ、リズムに合せて海老茶に白くWと染め抜いたワセダの旗が大浪のやうに搖れる。と、こちらは『陸の王者』を歌ふK・Oの濃紺の旗が一齊にハタめく。海老茶と濃紺！　あゝ、何といふ華やかな青春の色彩だらう！　ハーバートとエール、ワセダとケーオー、前章『早稲田大學物語』に海老茶の旗に象徵された青春早稲田を語つた筆者は、こゝに濃紺に彩られた時代の寵兒慶應を登場させる義理があるやうだ。

先覺者福澤諭吉先生

明治元年、上野の森に、彰義隊と官軍との交へる砲聲は、殷々として大都の空に反響し、物情騷然、そゞろに人心を不安に驅り立てるものがあつた。しかし、こゝは芝の新錢座の慶應義塾、一代の先覺者福澤諭吉先生は、毅然たる態度を以て舶來のウエーランド氏經濟書を講義しつゝあつたのだ。この時の意氣を、『慶應義塾五十年史』は次のごとく記してゐる——。

『我が慶應義塾は取りも直さず日本洋學の學脈を維持せしものにして、單に一私塾の名譽のみならず、亦おのづから日本文明の美事といふべきなり』

顧みれば、福澤諭吉翁が、少壯二十五歳にして江戸鐵砲洲なる奥平藩の中屋敷附屬の長屋に小さな家塾を開いたのは、幕末の風雲急を告げる安政五年の十月であつた。その後、鐵砲洲から芝の新錢座に移り、時の年號をとつて慶應義塾と命名したものこそ、實に今日の慶應義塾大學の誕生であつたのだ！

やがて、國内の騷亂收まると共に明治新政府の基礎も固まり、笈を負うて八方より義塾の門を叩く者も激增し、新錢座の塾舍ではもはや收容し切れなくなつて來た。こゝにおいて奥平家の菩提所である三田古川端龍源寺の一部を得て、塾はこゝに引移ることになつた。

時に明治四年の春、やがて、三田山上高く掲げて社會に示した福澤翁の高訓は、即ち、

『獨立自尊！』

尖端を往く塾の精神

福澤翁は中津藩の下級武士であつた。當時の下級武士や商人は封建制度の崩壞と共に、壓制を受けて極貧に陷り、維新の大業成就しても、また更に新らしい藩閥のために苦しめられなければならなかつた。それらの下級士族、商人の行く道は、野にあつて財を握り、その經濟的勢力を確立する以外に、自由を求める道がない。そこで福澤翁は時代に先驅して官尊民卑の陋習を破り、實學の奬勵を絶叫したのだつた。芝新錢座時代、塾生の衣服は一般に袴をはき、帶は角帶で、角帶書生を見ると、恰かも今日のペン印同樣問はずして新

錢座の塾生さんだと世間に知られてゐたといふことだ。

頭髪もまた、福澤先生をはじめ、一般に商人風に結髪したもので、それが西洋風に斬髪をするやうになつたのは明治元年前後で、塾の教師安岡雄吉、小幡篤次郎、中上川彦次郎の諸氏が、率先してこれを行つた。面白いことは、これまで塾御抱への髪結に松といふ男がゐたが、一同斬髪を斷行したので失業し夜逃げをしたといふことである。

それから武士の魂たる刀であるが、これも慶應二、三年の頃から義塾の人々は廢してゐたので、その風が漸次社會を支配し、遂に明治政府をして廢刀令を發布せしめるに至つた。

次は學問だ。實學主義の福澤翁は、學問を手輕に考へた。如何なる俗世界の些末事に關しても學理の入らぬところは無いと主張し、『語を換へていへば、學問を神聖に取扱はずして、通俗の便宜に利用するの義なり』『昔の學問は學問が目的にして、たゞその難きを悦びたれども、今の學問は目的に非ずして、生計を求むるの方便なり』と福澤翁の演說速記錄の中に述べてあるが、形式に墮した抽象的學問を以て高尚とする大學が多い中に、明治初年早くもこんな徹底した現實主義で、實利を尙ぶ學風を唱道したことは、實に一大卓見といはねばならぬ。

封建的遺習の徹底的破棄、文明開化、實學實業をモットーに、國會開設、自由平等を叫號した——一言にしていへば新らしき日本の尖端的代表が、慶應義塾であつたのだ。

資本主義の發達爛熟と共に、新日本躍進の波に乘つて、明治二十三年には大學部を新設し、三十年更に政治科を加へ、大正六年に醫學部を設け、大正九年には大學令によつて綜合大學となり、その外に幼稚舍、普通部、商業夜學校、商工學校、高等學部等々が設立され、大學を中心に一大學園を構成する大發展を遂げたのも當然だといへよう。この學の星座に學ぶ幼稚舍から大學本科までの、所謂慶應ボーイの數は、今や一萬二千有餘名、出身者は幾萬といふ數に上り、ワセダと共に官學に拮抗する二大學府としての雄姿は高く三田山上に輝いてゐる。

慶應大學の展望

三田の通りから少し入つたところに正門、それをくぐつて坂を上り切つたところに、右

手に赤煉瓦の圖書館がある。圖書館には最近故小山内薫氏の劇に關する藏書が全部購入されて、早稲田の演劇博物館に對抗して慶應の新らしい誇りとなつてゐる。それに、こゝは帝大の圖書館と違つて、五錢の入館料を拂へば、誰でもが入れるのだ。福澤翁の徹底した平民主義と啓蒙思想とがこの邊に察知されるではないか。

圖書館の横に三階建の煉瓦館がある。熱監局と教員室だ。其他は至つて質素な木造の教室が、幾棟も列んでゐる。慶應義塾大學といふと、さだめし豪華な校舍を想像する人が多いが、およそ正反對の質素さだ。しかし、そのどれでもが五十年六十年の光輝ある歴史の色に燻んでゐる。震災復興の帝大の豪華さ、改築成つた早稲田の新裝に對して、遙かに見劣りがするが、どこかに意氣軒昂たる往年の歴史と精神とが隅々まで漂うてゐるやうだ。

構内稲荷山にある三田演說館は慶應名物の一つだ。明治七年の起工で、日本最初の公開演說會場だ。こゝで自由民權、國會開設、藩閥打破の叫びの火蓋を切つたのだ。矢野文雄、犬養毅、箕浦勝人、尾崎行雄等々の塾出身少壯政治家が、侃々諤々の熱辯を揮つて、一路政治行動へ！　と若き學徒を煽動した記念館だ。明治十三四年頃の慶應義塾は、政治上に

も政府に對して一大敵國の觀があり、毎日毎夜、塾内で演說會の開かれない日とてはなかつた。擬國會、私擬憲法の起草、出張演說等の連續で、政治熱が塾全體を風靡してゐた。塾出身者も袖を連ねて政界に投ずるといふ有樣であつたが、明治十四年の政變以來、福澤翁以下時事に感ずる所があり、方向を一轉して實業界に精神を集中し、塾出身者も以後は相率ゐて農工商、就中商業に從事するものが多くなつたのである。世間ではこれを『書生歸商論』と呼んだものであつた。それは別として、さて、この演說館は東京府の史蹟名勝記念保存物となつてゐる。しかし、今日なほ此處で演說會は毎學期必ず開催され、最初より回數を重ねること五百六十回を突破してゐるのだ。

三田を離れて四谷信濃町に行かう。こゝには義塾が自慢の醫學部と附屬病院とがある。その中で他大學に見られない特色ある設備は食養研究所と豫防醫學研究所だ。後者は米國財團の寄附四十萬圓で建てた最新設備のものだ。食餌療法といひ、豫防醫學といひ、實學の徹底だ。

三田の學者群像

慶應の性質として、大學の中心は、理財科、即ち現在の經濟學部にある。『三田の學者』として、天下に名聲を馳せる先生は、最も此の學部に多い。經濟學部長の三邊金藏氏は會計學や簿記を教へてゐる質朴な感じの人で、世間に顔を出すことを好まないらしい。が、小泉信三教授をはじめ、高橋誠一郎、向井鹿松、加田哲二、野村兼太郎等々の少壯組に至つては、今賣出しの人氣教授ばかりだ。

小泉教授は、初期の塾長故小泉信吉氏の御曹子で生え抜きの三田ッ兒だ。故福田德三博士が日本一の折紙をつけた秀才で、經濟原論と社會問題とを擔當し、高邁な識見と圓熟した學理とで學生の指導に當つてゐる。菊五郎に似た好男子で、かつ貴公子らしくおちついた人柄は、將來の塾長候補者として有力な一人だ。經濟學史の高橋教授と共に、學生の人氣を二分し、三田の代表的學者にかぞへられる花形だ。

向井鹿松教授は經營學專攻で、產業の合理化研究のため先頃歐米視察より戻り、有益な

意見を實業界に與へてゐる。加田教授と野村教授とは、小泉、高橋の兩教授のやうに並べて呼ばれる人氣教授、前者は社會學を、後者は經濟史を擔當し、澤山の著述や論文で、評論壇においても名を謳はれてゐる。

この外長老には三田最古參の教授の一人として農業政策の氣賀勘重博士があり、また今は物故したが瀧本誠一博士は文獻蒐集學者として、汎く世に知られてゐた。少壯には保險論や社會政策の園乾治氏、銀行論の金原賢之助氏、交通政策の增井幸雄氏らがある。

法學部には學部長板倉卓造博士を筆頭に、占部百太郎、神戸寅次郎、西本辰之助、成瀨義春、高城仙次郎、等の諸氏が居並ぶ。板倉博士は國際公法と政治學との擔任、英國憲法史の占部博士、民法の神戸博士と共に元老組である。塾長林毅陸博士もこの組の一人として、法學部に得意の外交史を講じてゐる。元來林さんは外交畑に塾出身者の進路を開拓した人で、政友會から代議士として打つて出た事もある。前塾長鎌田榮吉氏が文部大臣になつたので其後任として政界を退いた。商法の西本、財政學の成瀨、金融論の高城の諸教授は法學部の中堅として、押へてゐる。其他比較憲法の山崎又次郎教授、支那問題の及川恒

忠教授、政治思想の槇智雄教授、國家理論の淺井清教授等々少壯教授を集めてゐるが、經濟學部に壓倒されて、振はぬ觀がある。

文學部は三田文學發祥の學部だ。かつては永井荷風氏がこゝで文學を講じたこともあつたが、軟文學排斥の聲喧ましい頃とて、流石に自由な慶應とはいへ、世間の手前もあつてか、それとも荷風氏が氣を腐らしてか、塾の教壇を去つて花柳の巷に沒したが、氏が在職中發刊した『三田文學』は今日なほ文壇の一角に獨特の地歩を占めて續刊され、下町情調讃美の藝術至上主義的な作風は、傳統的に塾出身の文士を支配してゐる。久保田萬太郎、水上瀧太郎の諸氏において最も濃厚に代表されるであらう。三宅周太郎、小島政二郎、南部修太郎の諸氏も三田派らしい人々だ。また一頃進出めざましかつた新興藝術派を牛耳つてゐた龍膽寺雄、久野豊彦、勝本清一郎の諸氏も三田ッ兒であり、途中退學ではあるが佐藤春夫氏などと同じく藝術至上主義的な色彩において、それらしい雰圍氣を漂はしてゐる。

それはさておき、塾の文學部長は心理學者として有名な川合貞一博士だ。教授には英文學に世界詩壇に盛名あるヨネ・ノグチ即ち野口米次郎氏があり、又我國英文學の耆宿戸川

秋骨氏や西脇順三郎氏等がある。獨逸文學には茅野蕭々氏、佛文學には井汲清治、廣瀬哲士の兩氏、國文學には歌人釋迢空として知られる折口信夫氏など文壇的に知名の人々を列ねてゐる。その他東洋史學に造詣深い橋本增吉氏、唐宋經濟史の大家で學士院恩賜賞を得た加藤繁博士、考古人類學の公爵大山柏氏など、一方の權威者を網羅してゐるが、何よりの特色とするところは、他の私學の如く、教授を他の大學から借りて來ずに、塾出身者を以て自給自足するところにある。これも三田傳統の獨立自尊の現はれであらう。併し、明治二十三年の文科創立以來、學生の數が至つて少く、時代によつては卒業生が一人もない年がある。近頃はそんなこともないが、それでも經濟學部や醫學部あたりが押すな押すなの盛況に比べ、また、好敵手早稲田の文科の大量生産的なのを思ひ比べると、何となく淋しい。だが、これも慶應傳統の實學本位の反映で、學問を生活の手段と心得てゐる塾生は、裝飾的な無用の學問をしないのだ。小說家志願者か、眞に學者となつて學問研究に志さうと欲する者だけが文學部に來るので、この邊は他の大學と事情が異り、慶大氣質をよく物語つてゐる點であると思はれる。

醫學部は大正六年に生れたから、もう十年以上の歴史をもつ。初代の醫學部長は故北里柴三郎博士であつた。醫學界の巨頭たりし北里博士と慶大との關係は、更にそれ以上に古いものだ。といふのは、明治の初期滯歐八ケ年の留學を終へて歸朝した北里博士を、時の政府と大學とは遇する道を知らず、折角の苦心研究も水泡に歸せんとしたので、故國に不滿をいだいた北里博士は、憤然米國の招聘に應じて故國を去らうと決意した。それを引留めて熱心に北里博士を援助し、傳染病研究所を創設せしめたのが、實に三田の福澤諭吉翁であつたのだ。後、傳研が文部省移管となると共に北里博士は門下を率ゐて別に北里研究所を設立し、幾多の人材を養成しつゝ徐ろに時節の到來を待つたのだ。

そのうちに、綜合大學の準備を着々とゝのへつゝあつた慶應義塾に醫學部が出來た。果然、福澤翁と北里博士との關係は、北里博士を招いてその創設に當らしめた。見よ、その傘下に糾合された堂々たる陣容を！

細菌學の重鎭北島多一博士は北里博士の後をついで現醫學部長だ。微生物學の大家で例の『六〇六號』の發明者秦佐一郎博士や解剖學の權威岡島敬治博士がゐる。脚氣病源の研

究で有名な照內豐博士、不滅衰傳導學說で世界的に名聲を馳せてゐる加藤元一博士もゐる。そのほか、熱帶病醫學の草間滋博士、病理學の川上漸博士、レントゲン學の藤浪剛一博士、小兒科の唐澤光德博士、耳鼻咽喉科の小此木修三博士、寄生蟲學の小泉丹博士、內科學の西野忠次郎博士、等々現代第一流の學者を網羅して、隱然官學帝大の醫學部に拮抗する壯觀である。

財界慶應閥の人材網

さて、諸君、次に塾員名簿を開いて慶應義塾出身者のなかで成功者と稱せられる人々を拾ひ上げて、塾が現今社會に對して有する勢力の量と質と分布とを一瞥しよう。

まづ實業界だ。打倒封建主義、建設資本主義の大旆をひるがへして、時代の尖端雄々しく闘つて來た慶應としては、當然今日では封建主義に代つて出現した資本主義の大寵兒を夥だしく輩出してゐる。資本の陣營に司令部として名をつらねる慶應出身者の財界人のいかに多きことよ。

三井における總理ともいふべき故團男爵の後繼者として、飛ぶ鳥落す勢力の池田成彬氏を中心に、三井系の會社には三田出身者が蝟集してゐる。それもその筈、政治熱から實業熱に義塾が方向轉換を試みた頃に、先輩の故中上川彦次郎氏は、三井の總支配人格として塾出身者を採用拔擢したからに外ならぬ。故朝吹英二、故和田豐治氏等の諸先輩も、陰に陽に實業界に後輩を引き立てた。從つて官界は帝大にゆづり、政界文壇は早稻田に一目おくと雖も、現代財閥巨商の首腦部は、他の大學を壓して、斷然慶應閥で固められてゐる有樣だ。

思ひつくまゝに名前を擧げてゆかう。政友會の久原房之助氏、時事新報の取締役會長で千代田火災保險の社長門野幾之進氏、大日本製糖の社長藤山雷太氏、帝國生命社長朝吹常吉氏、矢作水力の名譽顧問井上角五郎氏、昭和電力の重役福澤大四郎氏、日本航空輸送の社長西野惠之助氏、淺野セメントの重役淺野八郎氏、森村組の男爵森村開作氏、古河鑛業重役吉村萬次郎氏、成瀨組の成瀨正恭、同正行、同正忠の三兄弟、王子製紙の社長藤原銀次郎氏、北海道炭礦社長の磯村豐太郎氏、前大阪毎日、東京日日社長故本山彦一氏、臺灣

實業界の覇者槇兄弟、即ち新竹拓殖軌道の社長槇武氏（世界的登山家槇有恒氏の父君）、鹽水港製糖の社長槇哲氏、寶塚の經營者で關西實業界の巨頭小林一三氏、東邦電力の社長松永安左工門氏、横濱の財豪でスポーツ界の先輩平沼亮三氏、三越の重役鈴木梅四郎氏、帝劇の專務山本久三郎、福澤諭吉翁の養嗣子で中京財界の巨頭福澤桃介氏、昭和銀行頭取の生田定之氏、等々、一つ〳〵數へ立てゝゐたら際限がない。

當世慶應大學氣質

午後三時——學校が退けると三田界隈は火の消えたやうになる。皆が銀座へ進出するからだ。學生流行界の尖端をゆくシツクな正服姿、ペンの徽章を光らせて銀座に浮世學問の研究にゆくのだ。

『即ち學問の事は單に讀書のみに限るべからず、人間萬事これ學問なりとして、事々物々に注意せしむるの一事は、福澤先生が生涯塾生に向つて反復丁寧に敎示されたる名言なりしが、其の效空しからずして、現に義塾創立以來今日に至るまで、卒業生の數は既に幾萬

を以て數ふと雖も、何れも皆常識に富み、氣品を備へて、單に學問一偏の人に非ざるは、世上一般の認むる所に非ずや、左ればにや。後進者たる今日の學生に於ても、亦自ら先進者の轍を踏み、一方には畢生の力を盡して、其の本業たる學の勉强に怠らずと雖も、又一方では常に思を種々樣々に馳せ、或ひは同級會、各縣人會、社交倶樂部等の會を組織しては同窓相親み、先進後進相近づくの道を開き、或は文學會、英語會、三田法學會、同じく三田理財學會等の諸學會を開き、互ひに知識を交換しては、敎場以外、別に自由研究の餘地大なるを示し、……或はワグネル・ソサイティーを催して、淸音妙曲に積日の鬱を散ずるある等、義塾は仙境に非ずして、自ら一小社會の觀ある所以は、蓋し偶然に非ざるなり」と、これは義塾當局が發行する『慶應義塾總覽』にさへ、記してあることだ。

今日でも、幼稚舍（即ち小學校）で敎へる修身は、所謂忠孝だけに凝り固つた國定敎科書を用ひない。最初から『獨立自尊』の道德的感情と、實學本位の知識訓練とを吹きこむのだ。であるから、一人前の慶應ボーイが出來上つた頃には、彼等は、尖端的な社交人としての一切の條件を既に具備してゐる。そして著しく萬事に能率的で要領がよい。つまら

ぬ死んだ努力に力瘤を入れる愚を避けて、餘分の時間を遠慮なく消費生活の方面で文化人としての享樂を味つてゐる。

そこが慶應タイプのハツキリした點だとされるが、それを以て慶應ボーイを浮華輕佻の徒と混同するのは當らない。彼等には、さうしたスマートな半面に、義塾建學以來時代の先驅者として、文明開化の開拓者としての、逞ましき實行力がひそんでゐるのだ。案外ガツチリしてゐるのが、彼等ではないか。

見よ、精鋭の集ふところ

烈日の意氣高らかに、さへぎる雲なきを！

慶應！　慶應！

これは、ひとり野球の應援歌だけにとゞまるであらうか。

世俗に慣れた紳士でゐて、意外なほど健鬪力をもつてゐるのが、慶應人ではないか。その底力こそ、福澤翁以來、義塾が時代の開拓者として襲ひ來つた實力である。政界の表面に躍らずとも、廟堂の高きに居らずとも、言論の强きを誇らずとも、默々裡に社會の根幹

を動かす資本の原動力に占據し、根柢において他を制してゐるのが彼等ではないか。

精鋭の集ふところ、慶應よ、强かれ、正しかれ、聰明であれ、時代の寵兒慶應は、容易に王座を他に讓らぬであらう。

明治大學と東洋大學

明治大學

駿河臺上、名物のニコライの塔と相對して堂々たる雄姿を横たへたのが明治大學である。屢々學校騷動を起すことによつて有名であつた同大學も、スポーツの擡頭と共に次第に其の聲價を高め、特に野球、水泳、角力等に於ては覇者たるの貫錄をそなへ、學生界の人氣を集中せしめてゐる。

昭和六年十一月五十年記念式が擧行されたのだから、創立後すでに半世紀を經た、私大としては最古參で、明治十四年、日比谷大神宮の近くに生まれた、明治法律學校といふのがその前身である。最初の入學生は僅かに四十四名、創立者の岸本辰雄博士は、この小數の學生を相手にして、西洋の法律學を普及せしむべく絶大の努力を拂つたもので、その頃

の講師に、自由民權を說いて尖端を切つた、フランス歸へりの西園寺公望公があつた。やがてそれから今の駿河臺に移り、法學を賣りものにして幾多の司法官、辯護士を世に送つてきたが、遂に八千の學生を收容する大學園を形成し、名實ともに私學の重鎭となつた。

この學校で、最も特色とするところは、多くの中華留學生が在學することである。事變以後著しく激減してゐるが、中華學生が今日までに明大に學んだものは數千の多數に上り東都私立大學中最高である。明大が最初に中華留學生を迎へたのは、同校の分校で當時神田錦町三丁目にあつた、經緯學堂といふ、中華學生の特別教育機關であつて、恰も孫文、黃興等が第一革命の旗上げ當時なので、支那各省からの希望により、速成的に、一年から二年位の短期卒業制度を設けた。この分校の出來たのは、明治三十七年九月で、それから六ケ年、明治四十三年三月迄繼續した。

騷動の原因

明治の名物として知られる學校騷動は何に起因するか、これは同校の組織に根深く旣成

政黨の勢力が食ひこんでゐるからだといはれてゐる。昔から政友系の學校と見られてゐて現に西園寺老公なども名譽教授であるが、校友代議士にも政友系が最も多數である。ところが最近新しい校友の中に民政黨が侮り難い勢力を占め、この兩派の對立が學校行政にそのまゝ反映して抗爭に導くものと見られてゐる。今まで屢々くりかへされた騷動を見ても大抵この理由から起つたもので、つまり學長改選期に於ける兩派の利權あさりなのだ。

そこで、學長の人選についても、政友盛なれば政友系の學長を推し、民政が優つてゐる場合には民政系の人物を推すに至ることは當然であるが、しかし明大の場合では比較的政黨色の稀薄な人物を選んでゐる。つまりロボットであれば足りるからである。しかし、出來れば財政的手腕ある人物の望まれることは勿論で、人格者ではあつても、この手腕に乏しい横田現學長が不信任案をつきつけられるのも、要するにこの理由からである。

學長横田秀雄博士は前大審院長として令名をはせた人、人格、學識、聲望いづれに於ても歷代の院長中異彩を放つてゐた。司法官にめづらしい人間味豐かな人で、煙草の葉一枚

一厘をゴマ化したものを無罪にした、例の一厘事件、更に『夫にも貞操の義務あり』と判決した、夫婦貞操同權事件等で、時代を理解する名裁判ぶりをうたはれたものである。明大の學長となつたのは昭和二年であるが、明大との關係は古く、その中心である法學部に長く學部長をつとめてゐた。博士の專門は佛國民法である。

各學部の一瞥

五十年法律を賣りものとして來ただけに、ここの中心は何といつても法學部である。學部長の島田鐵吉氏は大審院の部長判事、昔は東大のボート選手として鳴らしたものだが、今は一杯の酒も口にしない溫厚の君子で、稍々老いたる感がある。刑法の岡田朝太郎博士は、學者にはまれな苦勞人で、この點だけでも相當の人氣をよんでゐる。自ら『岡朝』と稱し、また、新聞の三面に通じなければ刑法の眞髓になれることは出來ない、といつて『三面子』などといふ川柳名を用ゐるしやれもので、商法の水口吉藏博士と共に母校出身者である。

變り種は今度文學部の再興と共に新學部長となつた尾佐竹猛氏である。文學部長就任以前は、單に法學部の機關誌『明治法學論叢』の編輯主任といふだけで教授でも講師でも何でもなかつたものだが、博學多識の隨筆家として文學の方面にも認められてゐただけに、その人氣はすばらしいものであつた。現になほ大審院の判事である。また、松本重敏博士は新大學令による明大最初の學位を得た人で、しかも單科大學最初の博士といふので一時は非常にもてはやされたものであつた。

若手揃ひの商學部と政經學部

法律學校から出發した明治大學が、法學部を呼び物とすることに異論はないが、創立以來五十年の間に、時勢は幾變轉して、今はむしろワキ役として附隨的に育つてきた商學部、政經學部の方が、はるかに重要性を帶びて來た。勿論その內容からいつても動的であり、新興のものだけに若手の教授を多く抱容し、活氣のみなぎるものがある。

商學部長の志田鉀太郎博士は、安田の共濟生命で實務について研鑽を遂げた人で、學的

には特異性をもたぬ、比較的平凡な學徒である。明大との關係は相當古く、[illegible]授を兼ねてゐる。この學部長と好對象となるのは、社會政策と經濟政策とを敎へてゐる田中貢博士で、氏は才氣煥發、眼から鼻へぬけるやうな切れ者だといはれてゐる。勞働問題などに對しても相當の識見をもつてゐるらしいが、その才能も趣味もむしろ政治方面にあるやうだ。その他、明大商科出で交通、貨幣、銀行論等の太田黑敏男博士、金融の春日井薫、財務の松井敏生、保險の瀨戸彌三次諸氏の新進敎授が光つてゐる。

一方政經學部は、河津暹博士が學部長である。博士の傘下に集まる諸敎授中、異色のあるのは、社會學と政治史を專攻する文學士法學士赤神良讓敎授である。建遷第二世の稱があり『社會學研究』を主宰し、稀覯書の蒐輯に於ても有名でその所藏に係る社會學創始者コント所有の書籍などは、恐らく世界に誇り得る珍本であらうといはれてゐる。その他氏が歐米旅行中得たものの中には貴重な珍本が無數にある。

更に若手の秀才として經濟原論の西村文太郎氏がある。母校出身で、まだ英獨に學んで歸朝以來幾ばくも經たない。その他この部の敎授として明かな存在を示す人に、政治學の

村瀨武比古、殖民政策の小島憲、勞働法の森山武市郎の諸敎授がある。最後に、專門部の敎授に猪股淇清博士があるが、氏もまた明大出身の博士の一人である。明大出身の博士は前記岡田朝太郎、水口吉藏、松本重敏、太田黑敏男の四氏と猪股氏、これに變り種として滿洲國の立役者趙欣伯博士の六名である。

女子部の新設と文科の再興

男女共學の問題は一段落ついたが、まだまだ女子部新設の機運至らず、各校とも聽講生位でお茶をにごしてゐる間に、昭和四年の春、明大は卒先して女子專門部を開設した。今日では三百名に及ぶ女辯護士の卵が在學するといふから大したものだ。法科と商科の二種に分れてゐるが、その八割は法科で、女學校を出たばかりのいたいけなお孃さんに交つて四十を超えた老婦人も見受ける。學友會には文藝部、雄辯部、音樂部などあつて、月に一回位は各クラスで雄辯大會なども開き、女性の權利擁護のために雄々しい活躍を夢想しつつ紅唇をふるはして絶叫してゐる。

ところで、明大では、この專門部卒業生に對し、學則を一部變更して本科學部生として入學せしめる許可を得、七年四月から實施してゐるが、東京に於ける私立大學で、女子を學部の本科生として入學せしむるのはこれが始めての試みであるから、女子教育に一新紀元を劃するものとして注目されてゐる。

更にまた明大では、校友、教授等の多年の熱望が具體化して、七年の四月から、專門部として文科が開設された。開設とはいつても、これは二十餘年以前、第一回の卒業生を世に送つたのみで休講されてゐた文科の復活であつて、文藝科、史學科、新聞科の三つに分れ、文科の科長は尾佐竹猛博士、文藝科主任は山本有三氏、史學科主任は渡邊世祐博士、新聞科には小野秀雄氏が就任した。普通の文學部とちがつて特色があるから講義の內容を摘記すると大體左の如くである。

文藝科（晝間三ヶ年）

文學の味得をモットーに、近世現代の文學、現實の生活に即した文學、小說、創作、評論の制作や芝居、美術、映畫の實際的な研究を爲し、ある種の講義の公開、聽講生制度、

奬學金制度の設置を特色とし、講師は菊池寛、里見弴、豐島與志雄、岸田國士、室生犀生、山田耕作の諸氏で、石川千代松、石原純兩博士の自然科學の講義もある。

史學科（夜間三ヶ年）

日本國史を中心として古文書學、記錄に特色を出す。講師は、『國史概說』が渡邊世祐、笹川臨風兩博士『古文書學』伊木壽一氏『幕末明治史』尾佐竹博士『記錄』岩橋小彌太氏『日本近世史』中村孝也氏『東洋史』三島一氏等である。

新聞科（夜間一ヶ年）

高等研究科として文科科長の所管下に置き、組織は他の二科と異り專門學校の卒業者、學部二年修了者を入學資格とし、明大以外の大學在學生をも收容してジヤーナリズムに關する理論と實際を教授する。

東洋大學の新學長

學校騷動を繰りかへすことに於て明大と覇を爭ふのは東洋大學である。井上圓了博士の

哲學館時代から繰りかへされてゐるのだから、歴史的にはどの學校と雖も東洋大學には及ばない。

學長には中島前學長の後任として高楠順次郎博士が就任したが、學長が決定するとすぐ理事の詮衡が問題となり、その椅子の爭奪から、また〳〵一騒ぎ起つたりしてゐる。どこまで行つたら收まるものか、高楠博士の人格手腕を以てしても、こればかりは到底解決の途はないかも知れない。

東洋大學が大震災の打撃にもひるまず、間もなく再起することの出來たのは、ひとへに岡田良平氏の力によるといはれてゐる。しかし當時の學長境野黄洋氏の後任として學長就任を懇請したところ、見事に斷わられた。いかに岡田良平氏と雖も軋轢の絶える間もない學校の行政は手に負へぬと思つたのであらう。今度の高楠博士にしても、就任問題が起つたとき、維持員會ではやはり大臣級の人物でなければといふので高楠博士に目をつけ、再三懇請したが始めは決して引きうけ相にもなかつた。それを無理押しに押し進んで遂に泣き落したものと見える。

高楠博士にしてもすでに武藏野女子學院を創設してその經營に當つてゐるほどで、決して政治嫌ひの學者といふことは出來ないが、今東洋大學の目前に横はるのは財政的難局である。昇格はしたが、新大學令による內容を具へるのは今後のことで、設備その他莫大な費用が必要である。武藏野女子學院すら、經營困難で、その大學部の如きはいつになつたら實現が出來るかわからぬ狀態の今日、更に東洋大學を背負つて、果して巧みにこの難局を乘り切るかどうか疑問である。

私學最初の女學士

明治大學なども女子部を設けて多數の女子學生を收容してはゐるが、それは未だ男子同樣學部に入學を許してゐるのではない。かつて東北帝大が最初の女學士を世に送つてセンセーションをおこしたが、その後女學士の出現は殆んどなかつたといつてもいゝ位だ。ところが、東洋大學では、昨年二月十七日附で、女子學生の學部入學許可を得、來るべき昭和十一年春には早くも多數の正式手續を經たる女文學士が生れ出やうとしてゐる。しかし

これには入學資格として左記學校を卒業したものに限られてゐる。その他は現に各私大でやつてゐると同樣聽講生として許可されるものだ。

東京女高師（文科）奈良女高師（文科）日本女子大（國文學科）京都女子專門、東京女子大（文學科及國語專攻科）帝國女子專門（國文研究科）大谷女子專門（國文科）千代田女子專門（國文研究科）長野縣女子專門（文科研究科）相愛女子專門（國文科）私立聖心女學院高等專門學校（國文科）

商科大學國立の新陣容

所謂神田學生街の中心地からやゝ離れた、一つ橋畔に、創立以來どつしりと腰を据ゑて、ひしめき合ふ大小無數の私學派群に拮抗してきた『一つ橋の商大』も、昭和五年秋、つひにこのゆかりの地『一つ橋』をすてゝ、省線國立驛前の新校舍へ引き移つた。フレッシュな色調につゝまれた、宏壯な近代式建築は、重々しく、國立大學街を壓してそびえ、正門前の大通りは、『一つ橋通り』の名を冠して神田時代をしのばしむるものがある。

創立以來六十年間、財界に送り出した卒業生の數はおびたゞしいものだが、これらの校友によつて組成されたのが如水會で、大正十一年頃、校舍に隣接して建てられたその會館は內容外觀共に當時一橋系の誇りであつた。

一つ橋の歷史を三分すると、眞ん中の廿年間は、校長追ひ出し運動で終始してゐるといはれてゐる。初め矢野二郎校長を追ひ、次いで未だ赴任せざる清水彥五郎校長を排斥し、

更らに松崎藏之助校長に對しては、有名な申酉事件さへも惹起してゐる。要するに、これはこれらの赤門系の人物に對して、長くその下に雌伏するを餘儀なくされた一つ橋出身の教授連が、これに代らんとした運動であつた。

佐野現學長は、大正三年、坪野平太郎校長が病で隱退するに及んで後を襲つた、母校出身者として最初の人で、今日まですでにその職に在ること十七年、更に一昨年愛息の事件にからんで起つた辭表提出問題の解決後、新たに制定された學長選擧規則によつて向後四年間は學長の椅子が保證されてゐる。博士は、取引所學では海內隨一と評せられる學者で、廿八年の母校出身である。この前後の一橋出身の母校教授としては、廿六年の福田德三博士、廿七年の關一博士等があり、ともに母校の教授として佐野博士と學長の椅子をねらつた敵役であるが、福田博士はその後松崎校長と爭つて學校を飛び出し、關博士は大阪市高級助役としてこれも母校を見すてゝ榮冠はつひに佐野博士におちた。

ところが、福田博士はその後再び正教授として舞ひ戻つて來た。何しろ天下周知の學界のあばれ者、その上佐野學長よりは先輩でもあるし、教授界の都度福田博士から散々にい

ちめぬかれる。そこでいろ〳〵頭をひねつた末思ひついたのが、その頃擡頭しつゝあつた上田貞次郎教授の利用である。上田博士は第一回國際勞働會議に政府委員として出席して以來、一躍その名聲をうたはれた人で、機關誌『企業と社會』によつて新自由主義の旗を掲げ、多くの少壯學者をその傘下にあつめて侮り難い勢力を有してゐた。佐野博士は、この上田博士を福田博士と對抗せしめることによつて、福田博士の鋭鋒を避けようとしたのである。

この策謀が圖に當つたか、上田博士はつねに福田博士の矢面に立つて佐野學長のために辯じたものである。ところが福田博士なき今日になつて見ると、學長にとつて、この上田博士の勢力は一の脅威である。上田博士もまた學長の椅子をねらふ一人として屢々話題に上り、近い例では、佐野學長の辭表提出問題に際しては、衆目の見るところ後任學長として動かぬところであつた。

この上田博士も、今日ではいさゝか老いたる感あり、學生などからはスランプだなどといはれてゐるが、華々しい過去をもつこと、多くの業績を殘してゐることでは商大中有數

の學者であり、その公平な態度が新人派の推ずところとなるのだ。それに往年豪酒で聞えた人だけに、單なる商工經營の一學徒でなく、人間味も豊富で後進の世話をやく熱心もあり、極めて親切なので學生の信任もあついわけだ。次ぎに其の他の教授連を無秩序に俎上にのせて見る。

金子鷹之助氏は情熱の人、上田博士と故左右田博士との思想的立場を繼承して社會哲學史を研鑽してゐる。こゝにはもと福田門下の三羽烏として將來を囑望された大塚金之助氏があり學生の人氣もよかつたが、共産黨事件に連座、シンパとして檢擧の厄に遭ひ、去つたのは惜しい。日本經濟史の猪谷善一氏は上田博士の愛弟子で、血氣にまかせて機關誌『企業と社會』に無暗に書きなぐり、專攻の維新經濟史を忘れてゐるのではないかといはれてゐる。日本經濟史にはまた幸田成友教授などの老大家もある。

次ぎに商大隨一のドンキホーテといはれる堀光龜教授がある。この人の帝國主義的大演說は學生連に大受け（常識離れのした大名論振りに）であるが、この人昨夏滿洲へ旅行して歸つてくると、早速、琵琶湖運河開拓の大計畫を建てた。その目的とするところは、大

阪から敦賀を經て清津港に連絡し、大滿洲の物産を直接大阪へ集中しようといふのである。すでに土木設計の大家にはかり、費用五億圓で五ケ年完成の見込みだといふから驚くべき大論策である。この堀教授についでの愛國主義者に藤本幸太郎教授がある。氏は文部省の督學官をも拜命してゐてこの方面でも學内に相當の話題を提供してゐる。

高垣寅次郎教授、氏は佐野學長の愛弟子で、一部からは學長の腰巾着などゝ言はれてゐるが、貨幣學者として著名である。故左右田、土方兩博士の貨幣價値に關する論爭に横槍を入れたことから急に學壇に浮び上つて來た人で、『貨幣の生成』等の著がある。左右田博士の在世時代、その博士論文にケチをつけられたのが基で、勞作も永く埋れてゐたと傳へられてゐるが、最近博士になつた。しかしその傾向がやゝアカデミックに過ぎて生きた金融貨幣の實際問題に迂遠だといふ評がある。かつて、人間は心理の動物だから、これを把握しさへすれば、一切の社會現象はすべてその正體を明かにし得るといふ大發見に基いて、一種の社會心理學の上にその經濟學說の樹立をはかつたこともあつたが、いつか立ち消えとなつてしまつた。金融學者は他に、井浦仙太郎、山口茂、内藤章の諸氏がある。

地理を擔當する佐藤助教授は、實行派の大家として知られてゐる。古今書院から續々刊行する本が一つとして賣れないものはないといふのだから大したものだ。刑事法を論ずる常盤敏太氏はハゲで有名だが、それよりは、更に、この犯罪講義の實例のエログロが人氣をよんで、學生連がワイ〳〵押しかける。

このほか、筆のたつことに於て商大隨一の稱ある篤學者本多謙三氏、頭腦明晰で八方美人の井藤半彌氏、また現象學では我國第一人者山内得立氏がある。また外樣としては、文壇的にも名を知られてゐる内藤濯、吹田順助の二教授がある。

中央大學と法曹界

法律を賣りものにした私立大學では、明大の他に同じ駿河臺に中央大學がある。校風が地味なのと、偉大なる宣傳機關である運動部の不振のため、明治や法政の華々しい存在に比して惡くすると忘られ勝ちではあるが、その法曹界に於ける勢力は私學中隨一で、判檢事辯護士試驗の合格者率など、今日では他大學の向上につれてやゝ往時には劣るが、なほ群をぬく高率を示してゐる。創立は明治十八年。

初め英吉利法律學校として起ち、二十二年に東京法學院となり、三十七年に東京法學院大學と改稱、更に翌三十八年中央大學と改めて今日に及んだものである。明大が學校騷動で有名なのと反對に、創立以來五十年間まだ一回の問題も起さない。たゞわづかに昭和六年十月、この平和を誇る學園にも、校内食堂に絡んで、松宮事務部長を排斥する學生騷動が勃發し、相當危機をはらんだが、大したことなく解決を見た。

騒動のないかはり、流石に火事を名物とする神田の中心地、錦町に校舎を構へただけあつて、震災を入れて三度全燒の憂き目を見てゐる。最後の震災に潰えてから、明大の向ふを張つて駿河臺の一角に堂々たる校舎を新築した。

この學校の特徴は（日大も同樣であるが）その夜間專門部で、勤めの傍らの夜學勉强が多く、背廣もあれば和服もあり、中には制服の巡査まで交つて法律の勉强に餘念がない。だから中大出身の署長、警部なんかも相當にある。法學部以外に商學部、經濟學部などあるが、これは一種の附隨的存在で、卒業生なども、商經合はせて百名に滿たぬやうなことも屢々ある。

前學長の馬場愿治氏は、大審院部長から、判檢事辯護士試驗委員長、文官高等懲戒委員等を歷任した人で、中央大學とはその前身英吉利法律學校創設以來教鞭をとつた淺からぬ交渉がある。現學長原嘉道氏は故花井博士と共に我が法曹界の長老で、かつて司法大臣の榮職に就いたこともある。卒業生中最も知名なのは我が法曹界切つての名物男故花井卓藏氏で、これは法律學校時代の卒業、又智惠の横千として知られた政友會の故横田千之助氏

變つたところでは文明批評家として特異な存在を示す長谷川如是閑氏などがある。

教授連の顏ぶれも、近頃でこそ新大學令によつて專任教授も置かねばならず、從つて母校出身の新進學徒が相當勢威を張るやうになつて來たが、昔は帝大法學部教授連の出張所であり、判檢事や辯護士試驗委員の內職稼ぎのお顧客先きであつたものだ。だから、學生そのものが、一圖に判檢事、辯護士を目標として、ひたすら法律の勉學に餘念がなかつたやうに、教授連も一樣に法律にのみ拘泥して新知識の注入に頭の冴えを見せるやうな者はなかつた。五十餘年間一度も學校騒動のなかつたのは、一面には、この質實なる校風のために、時代的影響をつくること少なかつたためである。

法學部で、法學通論を受け持つてゐる天野德也氏は母校出身の逸才で現に幹事である。學校行政にも相當な手腕を見せ、將來は中大の經營を一身に擔つて起つのではなからうかとさへ期待されてゐる。母校出身の大物に、現理事で法學部長の林賴三郎氏と評議員の堀江專一郎氏とがある。ともに法學博士で、林氏は刑事訴訟法を講じ、堀江氏はイギリス法

を講じてゐる。故人花井卓藏氏の刑事の實習と共に、現學長原博士がやはり民事の實習をうけもつてゐた。帝大からは民法の權威穗積重遠博士や、政界出馬を聲明して教職をすてた鳩山博士なども講壇に立つてゐた。

經濟學部には、マルクス資本論の競譯時代、生田長江、高畠素之兩氏の鼻を明かして最初の邦譯を出し、忽ち誤譯の指摘に四面楚歌の窮況に追ひやられて、學界に話題をまいた松浦要氏がある。その後ドイツへ遊び、現に經濟原論を講ずる一方商學部でドイツ語の講義を受けもつてゐる位だから、學識人格ともに當時の非難に相當するやうな人物ではないのだが、出版屋のインチキ商策に籠絡され若さにまかせて短時日の譯出をはかつたのが蹉跌の因を爲した。同じ原論の擔當者に楢崎敏雄教授がある。その他殖民政策の川原次吉郎氏など少壯の篤學者として知られてゐる。

フレッシュな法政

法政大學といふと、いかにも新興の意氣に燃えた若々しさがある。明治時代から引き續いて來た歴史的な臭味がなく、最近代の時代的要望から生み出された清新さがある。ところが、事實は、法政こそ、むしろ法律を主とした私學の元祖なのだから驚かざるを得ない。

創立は明治十二年、薩埀正邦氏が神田紅梅町に經營した東京法學社といふのが、今の法政大學の前身で、私立では慶應を除いては最初のもの、早稻田も明治も中央もまだ創立の計畫さへ建てられてゐなかつた。十七年に紅梅町から小川町に移り、二十二年、佛語と佛法とを教へてゐた東京佛學校と合併して、和佛法律學校と改稱した。校舍を現在の場所に近い富士見町六丁目に新築したのもこの時で、その後明治三十六年、專門學校令による法政大學となつたものである。

かういふ古い歴史をもちながら、全校にみなぎる法政イズムが、いかにもフレッシュな

感じを與へるのは、ここの學生に金持ちの子弟が多く、のんびりしてゐることと、他大學からの出稼ぎ教授を嫌ひ、無名でも將來ある少壯學徒を集めて、獨立した地歩を築かうとすることからである。けれども最も不幸なことはこれらの少壯學徒が、多少社會的に名を成す頃になると官立大學にさらはれてゆくことで、今日まですでに惜しむべき教授の多數を失つてゐる。『官立大學教授養成所』といふ皮肉な評判を立てられるのもこれがためである。

法政をして今日あらしめた功勞者は、前學長故松室致博士だといはれてゐる。大正二年就任以來の努力は非常なもので、この點各學長中最高點を獲る資格があつた。しかしそれだけに學長專制の弊はあつた。昭和六年二月逝去とともに、若槻民政黨總裁が推されて、學長を豫約した顧問となつた。しかし、若槻男に學校行政の手腕を期待することは無理らしいし、政黨の總裁としての現狀ではその餘裕もあるまい。現にすべての事務は秋山雅之助博士が學長事務取扱といふ格で處理してゐる。

政黨といへば同じ民政黨で、濱口首相の秘書として一時すばらしく人氣を集めたことの

ある中島彌團次氏が、大正十年前後二三年間こゝで財政學を講じたことがある。古い辯護士で代議士で、明治二十年、東京法學社時代の卒業者だつた高木益太郎氏を除いては、出身者に變り種も少いし、ことに母校の教壇に立つ學徒の一人も出ないことは寂しい限りだ。たゞ現農大教授の小野武夫博士が四十五年の專門部政治科出身で、現に日本經濟史を講じてゐる。

學部の組織は法文學部と經濟學部（專門部は別）の二つに分れ、法文學部は法律科と文學科、政經學科の三科に分れてゐる。法律科の教授藥王寺志光氏は政界の長老貴族院議員古島一雄氏の女婿で、極めて學究的な快男子。帝大の牧野英一博士は板倉松太郎博士と共に前學長梅謙次郎博士の門下なので、今も法政とは相當深い關係がある。

專任教授としては、專門部第二部長細川潤一郎氏を始め、小林四郎、島保、横井二郎の諸氏がある。講師には裁判所の判事連がズラリと名をつらね、全講師の殆んど半數を占めてゐるといふことだ。

文學科の出來たのはずつと遲く大正も半ば以後で、法政野球部の擡頭と相前後してゐる。

宣傳も相當利いて、その尖端的なプログラムは、當時の學界に可なりのセンセーションを起したものであるが、效果はその割合にあがらなかつた。專任教授としてあつめてゐる文壇關係者には、平塚雷鳥との戀愛事件で名を賣つた森田草平氏をはじめ、田部重治、野上豐一郎、豐島與志雄、新城和一の諸氏がある。また演劇が好きで自らもステージに立つ熱情をもつ上智大出身の關口存男教授がある。また社會學の松本潤一郎氏、心理學の城戸幡太郎氏、倫理の大室貞一郎氏、更に西田門下の逸材三木清氏等のあることは法政の誇りであらう。主任の小山龍之輔教授は祝詞に通じた國文學者である。

經濟學部には、原論の高木友三郎氏が光つてゐる。前主任教授で、富山市の百萬長者の息、法政の經濟學部をして今日のレベルに引き上げたには、氏の財力が少なからず貢獻してゐるといはれてゐる。現部長の木村增太郎氏は經濟學博士で支那財政の研究家、かつてシンガポールの物產陳列館長をやつた時代もある。日本經濟史の小野武夫博士は、別記の如く母校出身の人。

法政大學は、一般私學の型を破つて學生を鍛へることが嚴格だといはれてゐるが、なか

でも經濟學部はことにきびしく、普通三ヶ年の課程も、餘程の秀才でなければ一二年は餘計にかゝることを覺悟しなければならぬ。ところが、學生の數は、經濟學部が最も多いといふのだから、この嚴然たる教授法の價値もすでに社會的に認められたといふべきであらうか。

航空研究科を置いて、學生訪歐機をヨーロッパ諸國に飛ばして見たり、野球部は先進學校を凌ぐ實力を有してすでに二度の覇權を握るし、このところ全く新進氣鋭といふ感を文字通りに示す法政である。

新興立教

六大學野球リーグのメムバーとして最新參ながらすでに二度の覇權を掌握したる立教は今や新興の意氣に燃え立つてゐる。が、そのよき宣傳の役割をうけもつ野球部を切り離して、何がよく立教の存在を誇稱するか。創立以來すでに六十年、昭和七年迄の卒業者千四百名を數へながら、未だ『立教』の特色を持たぬのは遺憾であるが、ミッションスクールの通弊としてやゝ覇氣を缺き、學生一般の氣風が、よい意味でのイージーゴーイングな點にその緣因があるのではないか。

創立は明治七年二月、米國聖公會宣教師チヤニング・ムアー・ウイリアムス氏が、築地居留地七十番地に、五名の學生を擁して一學校を創設したのが『立教』の築地時代の基礎となつたものである。

その後轉々として築地の界隈を移動しつゝ次第に規模を大にし、明治四十二年の秋、池

袋に一萬七千坪の土地を買收して新校舍を建築し、大正十一年五月には文部省の認可を受け、大學令による『立教大學』として誕生するに至つた。

學部の組織は、大學部、大學豫科、研究科に分れ、大學部は文學部、經濟學部の二學部より成り、文學部は更に英文學、哲學、宗教學、史學の四科に分れ、經濟學部は商學部、經濟學部の二科に分れてゐる。現在學生の總數は、本科豫科全部で千三百人。

總長のC・S・ライフシュナイダー氏は、米國の新教セント・アンドリユース・ブラザースフードに屬する人で、學生に絶對なる信頼を得てゐる。スポーツが好きで、立教がまだ築地の立教學院時代といふから、恰も日本の野球の創始時代であるが、その頃野球で負傷したのがもとでビッコになつてしまつた。氏のポケットマネーが學校の維持を助けてゐることは勿論である。

學長の木村重次博士は經濟學部長を兼ね、昭和六年長崎高商校長から轉じた母校出身者、立教學院當時の卒業者である。

教室で人氣のあるのは英文學科長の岡倉由三郎氏、經濟學科長で工業政策、經濟原論をうけもつ河西太一郎氏、經濟原論の田邊忠男、社會政策と歐洲經濟史を擔當する經濟學博士の本位田祥男氏などであるが、更に全學生の人氣を一身にあつめてゐる人に英語の久保田正次教授がある。殆んど學生と變りない生活態度で學生に接し、よく學生の氣持ちを呑み込んでゐる。氏が野球部長となつて以來、立教の野球部はすでに二度も榮冠を得てゐる。氏が佃島の自宅から長崎の同校球場へ日參するのは有名な話だ。外人教授として學生に受けてゐるのは、會話のボール・ラッシュ氏だ。その財政的手腕と米人に特有なフランクさが人氣を呼び、先年、野球部渡米の際などは、選手は同氏のために財政的に非常に惠まれたといふことだ。

出身者の變り種としては、岩下清周、松崎半四郎（森永）山口吉兵衛（伊）岡倉四郎（築地關係者）三原弘二（エノケン一座）水泳の齋藤巍洋の諸氏がある。

立教には、最近醫科新設の氣運があり、聖路加病院長トイスラー氏を中心としてその計畫が進められてゐる。

これが完成をつげた曉こそ『立教』の一大飛躍が實現されるときである。

純日本的な日本大學

日本大學といへば、古來中央大學と共に夜學生を收容する双璧とされてゐた。事實その夜間專門部が法律學生のために貢献したところは偉大ではあつたが、現在ではすでにその組織、內容ともに一夜學校の域を脫して、堂々たる綜合大學を形成してゐる。學部は、法政、商、文、醫、工、の各部に分れ、醫、工兩部のために駿河臺に大校舍を建てゝ更に飯田町の一角に七階建の大附屬病院を設けるなど、最近の進出には實に目覺ましいものがある。

ところで、この日大の創立については、他の法律學校出身の諸大學とやゝ趣きを異にするものがある。同じく時世の要求であつたとはいゝ、明治、中央、法政のそれが、法律知識の普及を目的としたに反し『すでに法治國としての基礎が確立された以上、もはや外國法を本位とする時代はすぎた、今後は我が國法を本位とせねばならぬ』といふので、時の

司法大臣山田顯義伯が主となり、金子堅太郎、穗積八束氏等と共に、皇典講究所の法律科を引き繼いで組織したのが今の日大の前身、日本法律學校で、開校したのが明治二十二年、金子堅太郎子が初期の校長に就任した。金子子爵から、二代の故松岡康毅男を經て更に平沼騏一郎男に至つたもので、更に今夏以來學長山岡博士が昇任して總長をついだ。

山岡現總長は母校出身の刑法學の權威、警保局長としても利け者の名を擅にしたが、平沼男の下に學長として震災直後の悲境に沈湎した日大にのぞみ、よく今日の大を爲さしめた手腕も全く敬服の外はない。何といつても日大の今日を語る上に、斷じて無視することの出來ない功勞者である。

現に理事として名を連ねてゐる中に、政界の大立物、政友會總裁の鈴木喜三郎と水野錬太郎の二氏がある。母校出身の政界人も相當多く、松田源治、川崎克、原惣兵衛、川口義久の諸氏はその筆頭である。

學界に認められた出身者は、前記山岡總長以外殆んどなく、現に同校の敎授としても、島田道夫、山名壽三の諸氏位のものである。

醫、文、工、三科の設けられたのは、法政文科と同樣最近時のことで、醫、文兩科は、その後種々な實質的活躍、例へば醫科の如きは科長罷免問題が擴大した大紛擾などによつて、事件の內容は兎に角、その存在を明かにしてゐるが、工科に至つては未だ有名無實の感がないでもない。

醫科の教授としては、問題の主人公額田博士の小兒科、現醫科長の松永博士、眼科では中村康博士、婦人科の岩田博士など、ともに我が醫學界に於ける著名な手腕家をあつめてゐる。

皇典研究所から出發した、非常に國粹的な建學の主旨に從ふ日大にとつて、餘りに近代的な企てとして目を刮らせるのは、昭和四年新設された專門部藝術科の大躍進である。藝術科（滿三年を經た六年三月末、第一回卒業生約二百名を出す）開始と同時にその音樂部に、ペツォールド夫人、故松平里子夫人、堀內敬三、內田榮一の諸氏を聘して講義を續けてゐたが、六年四月の新學期から大擴張を行ひ、兼常淸佐（概論）小松耕輔（作曲）伊庭孝（西洋音樂史）町田嘉章（德川時代史）武井守正（上代史）の諸氏を依囑し、更に技術

方面と和樂にも進出するため、舞踊に藤蔭靜枝氏、三味線に杵屋佐吉氏を迎へて新陣容を建て、新學期と同時にその授業を開始した。

この音樂部卒業生は、文部省令による中等學校教員免許狀を下附されるので、東京音樂學校の和樂奬勵と相俟つて非常な期待をもたれてゐる。

更にまた藝術科中の演劇科では、今後は實習に力を注ぐことになり、講師として歌舞伎王國松竹の總帥大谷竹次郎氏と松竹キネマ蒲田撮影所長城戶四郎氏を迎へ、大谷氏は『商業演劇論』城戶氏は『映畫事業論』を講義することになつた。

この他、演劇科の演技實習には、市川猿之助、花柳章太郎、靑山杉作、友田恭助、日本舞踊には花柳壽輔、同壽二郎、藤蔭靜枝、岡田嘉子、また映畫科には、脚本研究に如月敏、野田高梧、吉田百助、監督研究には池田義信、五所平之助、田中榮三、演技研究に岩田祐吉、井上正夫、南部邦彥、水谷八重子、栗島澄子、扮飾研究に上山草人、岡田宗太郎、岡田嘉子などが一躍大學の先生として迎へられることになつた。

地味な專修大學

專修大學は明治十三年、經濟法律に志す學徒のために創立されたもので、始め專修學校と呼び、故田尻稻次郎氏が最初の校長であつた。現學長は貴族院議員、法學博士阪谷芳郎氏で、初代とともに東京市長であつたことは面白い因緣である。大學組織となつたのは明治三十九年で、現在の組織は、大學令による豫科と經濟學部、法學部、專門學校令による專門部經濟、法律計理、商科に分れ、何れも晝夜二部教授となつてゐて、特典は全く同一である。

幹部役員を擧げて見ると、理事で、經濟部長、商業及計理學部長の河津暹氏は東大經濟學部教授で明大の政經學部長をかね、その學識については定評ある人、同じ理事の法學士法學部長須賀喜三郎氏は大審院部長、また、常務理事にして教務部長たる法學士道家齊一郎氏は、東京市の統計課長を歷任して、自治行政に腕を揮つた人。その就任以來專修大學は

蕭々態容を改めた。その犀利緻密なる頭腦と、縱橫なる機略とは、私學教育行政家として益々將來を期待されてゐる。

なほ財務監督の群馬水電株式會社々長田島達策氏、日本辯護士會の長老今村力三郎氏、前中外商業新報社長築田釵次郎氏、京濱電力株式會社取締役の高橋虎太郎氏、九州水力電氣株式會社々長棚橋琢之助氏、廣島控訴院長今村恭太郎氏等何れも理事として樞機に參與してゐるが、道家氏以下右七氏は悉く母校出身の社會人であるが、直接交渉のない著名な人物としては政友會の長老廣瀨爲久氏と滿洲問題の立役者として、對聯盟に縱橫の腕を揮つた松岡洋右氏がある。教授としては、少壯學徒として擧ぐべきものなく、前記河津、須賀、道家三氏の他法學博士栗津清亮、山口弘一、松原一雄、經濟學博士服部文四郎、永井亨の諸氏が代表的である。

理學部全盛の東北大

伊達政宗の偉名と共に天下に謳はれる青葉城下に、堂々たる外貌と實質とをもつて東北の文化を代表する東北帝大は、始め仙臺の理科大學と札幌の農科大學との二つの分科大學で組織されてゐたが、その後仙臺に綜合大學の設置を必要とし、當時の總長(初代)澤柳政太郎博士の努力により遂に今日の基礎をつくることが出來たものである。

澤柳博士が當時示した政治的手腕はすばらしいもので、醫科大學の設置のためには仙臺醫專を、工科大學のためには仙臺高工を、それぞれ合併して大學の附屬となし、更に將來法文科を開設する用意として狩野文庫を買ひ求めるなど、わづか二ケ年の在職中行はれたものとしては餘りに大きな收穫であつた。特に今日の大學病院の前身たる縣立病院を大學の管下に移す際など、縣會の反對に對抗してあくまで押し切つたあたり、政治的才能以外その膽力もまた傑出したものがあつた。

現總長本多光太郎博士は、人も知る、鐵の本多として、大阪帝大總長の長岡博士と共に世界的知名の學究である。この學究がどうして總長のやうな事務を主とする職に祭り上げられたかといふと、氏が昭和七年から東北大に實施された停年制にふれて、教授の職は勿論博士自ら作り上げた金屬材料研究所をも罷めなくてはならない。かくてはこの國寶的學者を失ふことになるので、總長改選期を利用して祭りこんだわけである。八年五月豫期の如く停年によつて總長專任となつた。手腕の有無は初めから問題ではなく、大學もまた博士に手腕を要求することはない筈だが、就任以來今日までの博士を見ると、これはまた案外總長として確かな腕の冴えを見せてゐる。

理學部の代表者

前にも述べたやうに、東北帝大は理學部中心の大學だから、こゝには斯界の代表的な學者が集められてゐる。理學部の最古參で、その開設當時赴任した數學の老大家林鶴一博士が今日も名譽教授で、講師として講壇の上に立つてゐるが、今なほすばらしい人氣があ

り、總長選擧の第一次豫選には候補者としてあげられたほどである。同じ數學の大家に藤原松三郎氏がある。林博士と共に最古參の一人で、しかもまだ現役教授である。位階勳等は學内の最高位正四位勳二等で本多總長よりは上位である。眞面目で交際も巧みで、同僚間にはうけがよいが、どういふものか學生には割合に親しまれない。

もう一人幾何學を專門とし、林博士の隱退後藤原博士と共に數學教室の二大巨石として著名な窪田忠彦博士がある。その他、林、藤原兩博士の弟子に當る岡田良知博士、京大出身の助教授高須鶴三郎博士などがある。

物理學教室で地球物理學の講座をもつてゐる中村左衛門太郎博士は、永く中央氣象臺にあつて地震研究に餘念がなかつた人、斯界の大家である。最近、眞空管を利用した極超微動地震計を完成し、八木山に新設した地震觀象所に設備したが、これがために同觀象所は我國屈指の地震研究所となつた。また一般物理學を擔當する大久保準三博士はこの教室第一回の卒業生で、數年前本多博士と共同で『强磁性體の理論』を發表し一躍名を爲した人。若い頃から苦勞したせいか、學者としては物のわかつた方であるが、すこし陰欝で氣難し

いといふ評がある。

物理學第二講座の高橋胖博士は長岡半太郎博士の門下で博士の折紙つきで東北大に赴任した人、理論と實驗の兩方に詳しく、この方面ではめづらしい多能の人である。專門はスペクトルの研究で、我國第一人者の定評がある。時間の觀念がなく、ウルトラ變り種として部内の名物である。第三講座電子論を擔當する三枝彦雄博士は學内切つてのブルジョアで會社の重役である。同僚教授連の羨望の的となつてゐる。

化學教室の眞島利行博士は有機化學の大家で、氏の門下からは、女理學博士黑田ちか子女史が出てゐる。北大理學部創設の際はその計畫に參與し、後暫らくその理學部長を兼務したこともあつた。身長五尺七寸餘體量二十二、三貫といふのだから學内に及ぶもののない巨人で、押しも相當强く、氣の弱い井上前總長の唯一の後盾として大過なからしめたのは有名な話である。

化學第三講座の箕作新六博士は有名な箕作閥の一人、嚴父は動物學者の住吉博士で、博士になつてからまだ間もない。運動家でスキーもやれば登山もやる。相當に放浪性があり、

一ケ所に落つくことを好まず講義なども臺灣の大學まで出張するといふ變り方である。

その他、物理學第四講座で素晴らしい秀才の評があり本多總長に惚込まれた山田光雄博士、分析化學の小林松助博士、生薑の研究で有名な野村博教授、實驗動物學の野村益太郎博士、菊の研究で著名な田原正人博士等々さすがに看板の學部だけに多士濟々である。

法文學部その他

現代日本の印度哲學界を背負つて立つ東北帝大の宇井伯壽博士は、今は亡き東京帝大の木村泰賢博士と共に押しも押されもせぬ印哲界の双龍であつた。同じくともに四十二年の東大出であるが、宇井博士は木村博士の闊達自在に對して冷靜縝密、詮索的で、その精確さには人を敬服せしめるものがある。博士の後繼者として囑望されてゐるのが同じ法文學部の金倉圓照教授である。

國語學の教授山田孝雄博士は正規の學歷を踏まず獨力でたゝき上げた人で、しかも官學の牙城に迎へられたのだから、それだけでもすでに學界の一異彩であるが、その學殖の點

に於ては國語學の本家上田萬年博士もかぶとをいはれてゐる。昭和三年學位を得たが、無名の田舍教師たる氏の論文の顧られる筈はなく、埋れること廿六年、大學教授に肩書の必要を認めた當局が古い論文をつぱり出し舊學位令最後の適用として文學博士が授與された。また西洋藝術史を講ずる此教授の兒島喜久雄氏は、大津事件で有名な兒島惟謙判事の息で、謹嚴なる論客である。

宗教學の鈴木宗忠博士は、東大の姉崎博士に似て何でもやれる人で、かつて唯物論をやつて賣り出したこともある。美學の阿部次郎氏は、たとひその提唱せる『人格主義』に崇られた都落ちであつたとしても、まだ〳〵東北大學文學部をあげての歡迎に値ひするものがあつた。しかし杜の都へ落ちついて以來、象牙の塔へ籠り過ぎたかあまりにその消息のとだえ勝ちなのは惜しい。法文學部の古參教授佐藤丑次郎博士は立命館大學長の田島錦治博士と京大名譽教授市村光惠氏と共に京大時代には酒豪三傑として謳はれたものである。また當時は普選實施を力說した第一人者であつた。この部にはかつてリカアドの原論抄譯を出した和田佐一郎氏がある。

工學部機械工學科の一枚看板として宮城音五郎博士がある。元來この科は仕事が地味で、通俗的人氣を得るやうな、華やかな研究發明が困難であるにも拘らず、他大學の機械科に比して決して劣らぬほどの存在を示してゐるのは、この宮城博士あるがためだといはれてゐる。なほ同科の教授としては砂谷、小門、抜山の三博士がある。工學部の變り種として石炭博士の稱ある理博岩崎重三氏を擧げることが出來る。高校、大學と各地の學校を渡り歩いたが、いつも運命に惠まれず、助教授にもなり得ず、すでに七十にも及ぶ年齢で、なほ孜々として石炭研究に餘念がない。

昭和六年井上前總長時代のこと學術研究振興機關創立協議會の席上井上博士は東北地方の不振の原因から、その農業振興の必要を强調し、既に生産力において北海道に二三倍のこの地方の農業振作のためには萬難を排して農學部を設置し、眞の綜合大學たる機能を發揮せしめねばならぬ、政府としても文教政策上國費支出に努力することは勿論、學界及民間の有力者も亦々この計畫を助成するたゝ奮起を望む を述べたところ、全會一致の贊同を得てゐるので、或ひは近く、農學部の 畫を見るに至るかも知れない。

北海道帝大の今昔

明治の初年、北海道拓殖のため開拓使を置いたとき、先づ拓殖の任に當るべき人材を養成することが必要であるといふので、明治五年芝の增上寺内に開拓使假學校といふものを設け、同八年にこれを札幌に移して札幌學校と稱したが、後九年に、米國のアマスト農科大學長ウイリアム・エス・クラーク博士を招いて學校の組織を改め『札幌農學校』と改稱した。これが今日の北海道帝國大學の前身である。

その後いろ〳〵の變遷はあつたが、明治四十年仙臺に東北帝國大學が設けられるに及びその一分科として東北帝大農學部となり、大正七年に始めて獨立して北海道帝國大學となり、農、工、醫、三學部の組織となり、更に昭和五年四月理學部が新設された。この他大學豫科、農學、林學の實科土木と水産の專門部等も附屬し、職員の數は八百人、學生生徒の數は二千三百人にも及び、北海道文化の中心となつてゐる。

農學部全盛

今日まで、北海道の中心となつたものは札幌農學校である。ここの出身者が全道を支配して、文化の中心は常に農學校にあつた。つまり農學校は北海道生活の中樞に働いて來た。だから、綜合大學になつて他の學部が出來ても、大學を支配するものはやはり農學部である。

當使札幌學校に於て米國より教師相傭ひ農學專門相開き生徒二十名を限り年齡十八歲以上二十五歲迄にして志願の者は學業左三試を以て入校差許候條云々

一、英語を文法地理の暗記並英文和譯、和文英譯英作文及英文書取等なし得る者

一、算術及代數學概略なし得る者

一、漢文の歷史等を講じ其義を解し且普通の作文をなし得る者

第一條　生徒は體質壯健にして已に種痘天然痘をなせし者

第二條　生徒在學期限は凡四ケ年とし卒業の上北海道に從事する五ケ年とす

第三條　生徒課に入學する者は貸費生とす

かういふ條件によつて札幌農學校生徒になつた青年達が、寄宿舍に入り、散步料まで貰つて鹿の肉をむさぼり喰ひながら、英語演說や農學をやつてゐるうちにいつか第一回卒業期を迎へた。明治十三年七月で、その顏ぶれは、荒川重英、佐藤昌介、大島正健、小野兼基、黑岩四方之進、渡瀨寅次郎、內田瀞、佐藤勇、田內捨六、伊藤一隆、山田晴太郎、中島信之、柳本通義の諸氏である。

一代の才人大島正健は學校を出てから五十餘年、轉々として社會の間道を步き、行くとして可ならざるなき才能をいだきながら、遂に浪人として一生を終つてしまつた。十年前の大正十五年、創基五十年の祝典の際、第一回卒業生總代として、七十に近い老人が、四十そこ〳〵の矍鑠たる壯軀をもつて現はれ、祝詞を讀み上げたには參列者一同目をみはつたといふことだ。

この大島以上に數奇の運命に弄ばれたのが荒川重秀である。才氣煥發、いつも級中の指導者となつた同氏は、拓殖事業にも向かず、學者ともなり得ず、役人になつたり、新聞記

者になつたりしてゐたが、何を感じたものか、大正十四年頃京都大學の法學部を出て法學士となり、知る人を驚かした。かういふ間に伍して五十餘年間、一歩も札幌を動かず卒業後その儘滯留したのが前總長佐藤昌介博士である。

人物揃ひの初代

次いで明治十四年七月には第二回卒業生を出したが、その數十人これはまた全く人物揃ひをもつて知られてゐる。卒業に際しこれらの人達が學校へ屆けた卒業後の目的と、今日に於ける社會的立場とを比較して見ると非常に面白いので左に載せて見る。

人名	第一志望	第二志望	人名	第一志望	第二志望
足立元太郎	畜産學	昆虫學	野村金彌	畜産學	作物栽培
藤田九三郎	土木工學	農用工學	宮部金吾	植物學	其の應用
廣井勇	農用工學	土木工學	太田稲造	開拓	作物(甜菜)
池田鷹次郎	獸醫學	畜産學	高木玉太郎	純粹化學	農藝化學

内村鑑三	動物學	漁撈及養殖	

右表のうち池田鷹次郎とは今の北大總長南博士、太田稲造とは最近アメリカに客死した新渡戸稲造博士のことである。南、宮部兩博士は、いづれも專攻の學問を忠實に研究し續けて遂に今日の農學部の基礎をつくり、佐藤前總長と共に三博士と稱されたものである。廣井勇博士もまた志望通りの工學を研究して關門海峽の大鐵橋を設計するほどの大工學者となつた。ところが面白いのは甜菜を作るつもりの新渡戸博士や、漁撈や養殖をやる筈の内村鑑三氏の其の後である。同氏の息祐之氏は目下同大學醫學部精神科の教授である。

内村鑑三氏の才能は全く天禀であつて、在學時代あらゆる學科に於て同輩をぬいてゐた。宮部博士はその專門とする植物學を在學時代から得意としてゐたので、ほかのものでは内村に負けてもこれだけは俺のものとばかり一生懸命勉強した。試驗が濟んで見ると果して九十八點といふ好成績だつたが、内村氏は百點であつた。新渡戸博士は大變な勉強家であつたが、數理的才能がなく、この競爭圏内から全く離れてゐた。

その後この學校から出した人物は相當あり、特に初代は揃つてゐた。第三期の高岡直吉、

佐久間信恭、調所恒德、第四期の頭本元貞、渡瀨庄三郎、志賀重昂、武信由太郎、早川鐵治などはその尤なるもので、その農場の解放で當時文壇に問題を投げ、最後に情死事件で有名となつた有島武郎も第十九期卒業である。

現總長南鷹次郎博士は、昭和五年十一月、佐藤前總長の辭任により選ばれて第二代總長となつた人で、別記の如く宮部博士とは同期の母校卒業である。教授となつたのは明治四十年、農作物講座を擔當して大正八年農學部長となり、昭和二年四月には辭して名譽教授となつてゐた。現に北海道農會長、產業組合聯合會長をつとめ、北大及北海道の農產諸事業に盡瘁してゐる。氏は北大の乃木將軍といはれ嚴格な中にも溫情があり、對者をすつかり魅していかなる難問題でも容易に解決することが出來るといはれてゐる。

同大學各學部長は昭和六年が改選期に當つてゐたので、何れも當時からの就任である。農學部長須田金之助博士は山形の人で前農學部實科主任。工學部長は阿久津國造博士、理學部長は田所哲太郎博士で、四十三年母校の農藝化學科を卒業以來北大に勤め昭和五年理學部開設と共に次席教授となつた。醫學部長は細菌學教授の中村豐博士である。

沈衰の同志社

同志社はわが國私學の先驅者で、明治の初年から中葉にかけたわが文化史上特筆すべき役割を演じたものである。所在地洛北の山紫水明と相俟つて、その存在がいかに當時の青年子女を魅惑したことか。

創立は明治八年、基督教的教育家であると同時に、熱血兒新島襄が、山本覺馬と結社し、米國教數師デビス氏の贊助によつて開設して以來、キリスト教をもつて德育の基本とする知德並行主義を標榜し、我が國に於けるミッション・スクールの嚆矢を誇るだけあつて、その同人または卒業者の中にはキリスト教の篤信者を多く輩出してゐる。

創立者の新島、山本兩氏は勿論、小崎弘道、横井時雄、下村孝太郎、海老名彈正、西原清東、片岡健吉、原田助、中村榮助、山室軍平、安部磯雄、德富兄弟等々いづれも日本キリスト教史に於ける粒よりの大物ばかりで、往時の同志社が私學一方の覇者としていかに

發刺さを誇つたかは想像に難くない。變り種として、樂壇の論客伊庭孝、論壇の鬼才故高島素之などを生んでゐるのも面白い。

明治二十三年一月、新島襄が大磯の客舍に長逝して以來、約半世紀間、幾多の苦難に遭遇しながらもよく同志社本來の精神に則る改革を遂げ、創立當時わづかに八名の學生を擁したに過ぎなかつたものが、今日では同志社全校を合して五千を數へる大學園に膨脹した。

規模は擴大されたが、同志社もすでに盛りを過ぎたうらみがある。創立者の傳へた往年の熱は、もはや近代的に組織化された同志社に幾何も殘されてゐないかも知れない。組織化されたといつても、それも單なる外形的のもので、內容的に新味を見出すことは出來ない。しかも少壯教授に人なく、幹部教授たる校長、部長連は、本部を形成せる總長、庶務部長、會計部長三巨星の傀儡たるにすぎず、徒らに合理化された學校經營の惡例を見るに過ぎない。

現總長大工原銀太郎博士は昭和四年に推された第九代目である。前東大總長古在由直、前帝室林野局長本田幸介兩博士とともに明治十九年の駒場出身で我が農學界の三羽烏といはれた人。九大總長として在職中法學部問題、左傾教授狩りと就任早々いろんな難問題で惱みぬき、不評は擴大して遂に辭職の止むなきに至つた。氏も一面には直情徑行で策を知らぬ純學者肌ではあるが、同志社の如く內訌の少ない學園に於ては、政治的手腕よりは、むしろ學者的熱意の方が必要であるかも知れない。しかも氏はまだ年も若く精力もある篤實なるクリスチヤンであるから、或ひは同志社の甦生に意外な功績をのこすかも知れない。

しかし、今年は、早くも任期滿了となつたので、十月半ばの改選期を控へ、かねて辭意を表明してゐたが、理事會では滿場一致現總長の再選を決議し、留任を懇請したので、大工原博士もこれを受諾し、つひに辭意を翻して重任に決した旨を發表した。これなども內部に於ける信任の程度をうかがひ知るに充分なるものがある。

不遇な京城帝大

昭和七年十月十五日京城帝國大學の開學式が、總督、總監、內地からは初代の總長服部宇之吉博士、二代松浦鎭次郎氏、臺北帝大總長幣原垣博士その他在鮮官民の主なる人々の臨場を得て、極めて盛大に擧行された。

大正十五年創業以來七年間、總長はすでに四代にも及んでゐるのに、どうして今まで開學式を行はなかつたものか。別に大した理由はなかつたのかも知れぬが、初め大計畫の設計に從つて着手しわづかに一部分の完成を見たまゝ豫算は毎年削減され、遂に皮肉な鴨綠江節となつて、うらみの聲が教授連の口をもれるやうになつたのは事實である。しかもまたこの大學の建設が、內地に於けるそれの如く建設地方民の要望によつて生れ出たものでも決してなかつた。開學式のせん延したる理由もその邊に潛むのではないか。

二、三年前の話である。（今もさうであるかも知れぬ）研究費は不足だが教へるためには研究しなければならず、研究を續けるには金が要る。そこで熱心な學徒は自分の月給を割いて、書物や機械を買込んだものである。これがために薄給の書記と間違へられた教授や、裏長屋に住む助教授もあり、實に悲愴な狀態であつた。前總長志賀博士などは『折角苦心して集めたよい教授も、こんなことではいつ逃げ出すかわからない』と悲痛な面もちで語つたことがある。創業以來、各大學から引きぬいた少壯にして前途を囑望される教授は無數にある筈だが、一向期待の報ゐられぬのはこの故であらう。しかしかういふ反面に、これは城大のみならず、朝鮮の官廳のどこにでも多少はその傾向はあるが、我が城大もまたこの一般的な例にもれず、月給日になると脂粉の香が廊下に滿ち、紅裙連がうろ〳〵して平常には似もやらぬなまめかしい風景を現出するといはれてゐる。ことに法文學部の若い教授連に多いさうだ。勿論若い人達が、たとひ教授であらうと何であらうと、傾斜の巷へ足をふみ入れたところで不思議はない。が、一說に、いつか京城神社の祭禮の時、某々一團の教授連が頰被りして料理屋の山車に入つてゐたのを見たと傳へられる。こんな下等

な行動は人格的な不信をかもす以外にすこしも取りえはない。かういふ人達の間から立派な業績の生れる道理はないのだ。原因は兎に角、大した勞作を爲し得ない教授連の揃つてゐることも事實らしい。

故吉野博士などもかつて、城大へ懇望されたさうだが『朝鮮大學なんぞにはどうせ譯のわからない者ばかり行くんだらうから』と見合はせられたさうだ。博士の慧眼には敬意を表してもいゝ。

現總長山田三良博士は就任前東大法學部長であつた人、政治的手腕も相當認むべきものがある筈だが、文部省にあつて三十年來教育行政の腕をみがいたといはれる松浦前總長さへも、いかんとも爲す術を知らなかつた、この京城大學の財政を、容易に切り廻し得る自信はうたがはしい。山田博士が總長になつたのは、戸澤法學士が法文學部の部長だつたときで、もし文學派が部長だつたら、山田博士の就任は見なかつたかも知れぬといはれてゐる。つまり、法科の連中が恩師に報ゆる手段としてか、或ひはまた從來文科に押されてゐた法科の勢力をして文科と對等ならしめるための手段として選んだものであらうといふ觀

察である。

兎もあれ山田博士の總長實現には、いろんな曲折を經たものらしいが、就任以來の動きは相當華やかなもので、學士會京城支部の設立、學士院奬學資金の獲得等々城大の認識を高める上の努力を怠らない。

城大醫學部の母胎は京城專門學校と總督府醫院にあつた。當時醫專の校長で、同時に總督府の醫院長であつた後の總長志賀博士が、城大創立委員になつて醫院は大學に移管され、醫專の教授が大學の教授になつたものである。これがために醫專の教授は二流どころの集中となつたが醫學部と醫專との關係は極めて親密にいつてゐる。ところが大學病院の方になると、『醫專卒業生』に對する惱みがある。前にも述べたやうに、病院の母胎は醫專にあつたので、醫專の卒業生は病院を我が物顔するため、城大出の醫學士と反目を來し、相當うるさい事態を生みかけたものであるが、今日では醫專系の教授は殆んど影を消して、外面的には兩者の關係も靜穩である。しかし、こゝに城大出の醫學士にとつて更に大なる惱みがある。それは、志賀博士が總長の時代、醫學博士の濫造を慨して、城大出のものは、

少くとも五年間病院に勤務しなければ、いかに價値ある論文を提出しても博士の學位を與へないといふ不文律を造つてしまつたことだ。當然五年を經たところで學位にはなか〳〵有りつけないといふ結果になる。醫博の濫造は周知のことで、かねて學界に問題となつてゐるが、こんな標準により、玉石を混かうして有爲の材を永く不遇にかこたしめるのも考へものだ。いはんや病院勤務などになると、博士になれなければ愚鈍のやうに扱はれ、老看護婦には蔑視され、若い醫學士にとつては全く陰鬱そのものである。

城大の組織は、法文學部、醫學部の二つに分れ、法文學部には附屬圖書館があり、醫學部には附屬醫院があつて、醫院の方はその經營上獨立會計となつてゐる。全職員は勅任教授が二十名、奏任教授、助教授が豫科を合せて百六十名、これに事務官二名、司書官、藥局長各一名、判任官が助手、書記、司書を合せて百名である。

災厄の續いた九大

九州帝大の存在も今ではもうかなりに古く、その後陸續として新設された東北、北海道京城、臺灣、大阪等の諸大學に伍しては、もはや立派な古參である。が、明治三十六年京大の一分科として福岡に醫科大學が設けられて更に四十三年十二月、東大、京大に對峙して九州帝大が設置されたときには、少なからぬセンセーションを起したものである。

福岡醫科大學は後年の九州帝大の前身と見るべきものであつたが、京大の一分科であつた爲めに九大の創設を見るまでは京大總長の支配下に置かれた。工科大學が增設されると同時に、山川健次郎男が新帝大初代の總長として任命された。教授には新進の若手が多く、講義の內容など極めて清新で自由で意氣頗るあがるものがあつた。二代の總長は眞野文二博士、三代は大工原銀太郎博士、現總長松浦鎭次郎氏は四代目である。

初代の山川男は、東大の總長をもつとめ、當時はすでに勅選議員として納つてゐたので

あるが、案外にも九大總長を諾し、東大時代目をかけてゐた新進學徒をぬいて來て教授とし工學部をつくつた。その後二年を經て工學部の陣容も全く成つた時、再び東大總長として九州を去つた。山川男のあとを襲つた眞野文二工學博士は、當時文部省實業學務局長たりし人で、さすがに本省の顯官だつただけに、主務大臣や局長達とも折合ひよく、九大の事業は年と共に進捗して、大正九年には農學部、更に十五年には法文學部をも併置することとなり、綜合大學としての立派な內容をもつに至つた。

眞野總長時代は前後十二ケ年の長きに亘つたが、この圓滑なる手腕家も最後に引き續いて起つた不慮の災厄に遭ひ、遂に辭職せざるを得なくなつた。最初は十二年に、工學部本館に起つた災厄、次いで十四年には、當時附屬病院長であつた今淵博士、コルセットで名をあげた住田博士、若返へり法で騷がれた榊博士の三氏を中心とした、醫學部の特診事件が起き、一世の耳目をあつめた結果、右三氏の辭職でケリがついたと思ふと、すぐ今度は火災(八月三十日)が起つて醫學部の大半を燒失し、更に翌九月九日には再び火災が起つて醫學部の殘部を燒失するなどの不祥事が續いたので、眞野總長も遂に十五年三月責を負う

て九大を辭し、今は勅選議員となつてゐる。

總長學に落第

三代の大工原總長は、九大に總長の互選規則が出來て最初に選出された人、當時朝鮮總督府の模範場長で九大教授を兼務してゐた。明治十九年の駒場出で、酸性土壤の發見者であり、古在前東大總長、前帝室林野局長本田幸介博士とともに、農學界の三羽烏と稱された權威者であるが、あまりに學者肌の一本調子な爲め、就任の當初から法文學部の確執に惱まされた。

これは法文學部教授の內訌問題で、同部は血氣盛りの若手教授ばかりが揃つてゐた爲め事毎に爭ひをかもしてゐたが、昭和二年九月に至つて果然表面化し、法科の教授が木村、佐々の二派に分れ、聲明書を出したりして露骨にいがみ合つたものである。總長は兩派を成敗する方策をとり、主腦者と目された木村、瀧川、東、山の內、風早、杉の原の兩派三名宛を休職としたが、この苛酷な制裁は自己の不信任を招くに過ぎなかつた。

ところが昭和三年三月になると今度は時の岡田文相から各大學へ左傾教授の罷免を命じて來た。九大の教授でその選に入つてゐたのが、内訌事件で問題の人たりし政治學の佐々弘雄氏と經濟の向坂逸郎、石濱知行の三教授であつた。驚きあわてゝ九州へ歸つた總長は勿論三氏罷免の決意をしてゐた。これを感知した三氏は熟議の末、自ら辭表を出したので表面上、無事に解決を見た感はあつたが、この弱腰の態度は益々教授連の惡評を買ひ、中には總長の責任を問はんとする者さへも現はれるに至つた。

この時再燃したのがさきの内訌事件に休職となつた、東、瀧川兩教授の復職問題で、つひには總長と法文學部六教授との確執となり、更に擴大して全學部の問題となり、時と共に反總長の氣運濃厚となつたので、こゝに總長も意を決し、辭表を提出するに至つた。かくして大工原總長は在職約三ヶ年、すべてを失敗裡に終つたが、もう一つ同氏の殘した惡政がある。それは同氏のつくり上げた滿六十歳停年制で、退職手當一級俸約一萬圓といふ規定が禍ひし、毎年三四名宛も出る退職者のため賞與の低下を來して愈々同氏への不評を高めるばかりであつた。

大工原氏の後をうけた四代の總長、松浦氏は總長選擧に於ては絶對過半數で當選したが氏にその意なく、幾度となく辭意を言明したにも關はらず、文部省方面の先輩と九大からの懇請に餘儀なく受諾したものである。氏は東大政治科の出身で、文部省に入り二十一代の文部大臣に仕へ、次官から、京城大の總長となり、更に九大へ移つたもので、行政官出身なだけに、流石紛擾の多い九大も近年更に波瀾を見せず、ことに全學一般に給與がよくなつたので甚だ好評である。

大家揃ひの醫學部

東北帝大が理科大學として生れ、今日でも理學部を主とするやうに、九大は醫學部が主となつてゐる。だからその設備に於ても教授の顔ぶれに於ても東大に比して遜色なく、研究目標の清新さに於てはむしろこれを凌ぐものさへある。その錚々たる大家を揃へた教授連の中から更に變り種を左にぬいて見る。

ある意味で、九大を代表するといはれる人に久保猪之吉博士がある。耳鼻咽喉科の權威

で、その業績にも大なるものがあるが、食道直達檢鏡の發明はその最も大なるもの、昔、尾上柴舟や服部躬治氏などと新派和歌會『いかづち會』を起して活躍したこともある歌人であり、蝶類採集家としても名高い。金子廉次郎博士は、七十餘名の、醫學部きつての弟子をもつてゐる。當然ある意味では醫學部隨一の人氣を集めてゐるともいへる。ワイル氏病發見の大功績をもつ人である。

三浦謹之助博士が、その生前、『九大に武谷といふ立派な醫者がある』といつたことがある。その武谷廣博士は內科の筆頭教授で、神經系統の病氣なら三浦博士にでも一歩も讓らぬと頑張つたほど研究心と自信の强かつた人である。嚴格そのものといつたやうな人格者で、三浦博士のいつたのも要するにその醫學的手腕でなくその人物についてゞあつた。後藤外科には學生時代たつた一度でも首席を讓つたことのないといはれる後藤七郎博士がある。『負け嫌ひの七ちやん』で通る人、昭和三年醫學部長になると同時にまた軍醫監に昇進するといつた幸運兒。

今は名譽教授になつた、病理學の中山平次郎博士は、專門よりはむしろ考古學者として

有名で、全國の古墳や貝塚を掘りかへして歩いてゐるが中でも筑紫、早良、糸島の各郡から銅劍、銅鉾を初め石斧、石器を發掘して我國の金石併用時代を證明し、また日本文化大和中心說を覆へして九州中心說をとなへ、考古學界に劃期的の進展を招いた。獨身主義を押し通し六十餘歲の今日まで一度も娶つたこともないといふ變りものである。

問題の人榊博士の後任として慶大から來た人に下田光造博士がある。皮肉家の宮入慶之助博士さへ『あれは大物だ』とほめた位に腹の太い人物で、神經衰弱の患者などは禪から得た精神療法で癒してしまふ。醫學上の業績としては中樞神經系の病理組織學的研究と、化學的研究を奬勵して燥鬱病患者の新治療法を發見してゐる。

醫學部の恩人

九大醫學部にとつて忘られぬ人がある。それはこの學部の前身福岡醫科大學が京大醫學部の一分科として創設された際委員長となつた大森治豐博士である。この人は明治二十四年、當時醫學者連が最も危險視してゐた腹部の切開即ち帝王切開術の一百例を發表してゐ

が國十四番目の醫學博士となつた外科學の重鎭であつた。

この非凡な學者が創立委員長となつて、全國から著名なる手腕家をあつめ、自ら初代學長として現在の九大醫學部の基礎を固めたのである。酒豪として聞えた人で、手術室でも書齋でも實驗室でも、氏が使用するすべての室に酒の德利が用意され、仕事中でも何でも欲するに隨つて呑んだのは有名な語り草となつてゐる。博士はまた同時に發明家で、醫療用品をいろ〳〵考案した。今でも手術室用として使はれる、緒のない先皮ばかりの下駄や、白い手術服などそれである。今も大森式便所などといふのが九大の整形外科教室に殘つてゐる。

學界人物傳

東西帝大の二巨人

『いやだといふのに無理に押しつけられて、何がありがたいもんかい。しかし、一たん引受けた以上は、大いにやるよ』

初代大阪帝大總長に就任した長岡半太郎博士は、かう言つて、口をへの字に結ぶと大きく腕組みをした。——全く此の偉大な世界的科學者に、厄介な大學總長の事務をとらせることは、一面氣の毒なことだ。が、理學部を中心として出來上る新設大阪帝大は、どうしたつて長岡博士のやうな人を總長に戴いて、その下に天下の人材を網羅して貰はなければ困るのだ。

『研究の自由を奪はないならば、なりませう』

これは、長岡博士に續いて東北帝大總長に祭り上げられた鐵鋼研究の世界的權威本多光太郎博士の就任受諾の日の言葉だつた。

これまで、研究室に閉ぢこもつて、後進の研究を指導する傍ら、數々の巨大な發明や發見を完成して、常に世界の學界に呼びかけてゐた我が國寶！　我が科學界の二大巨人が、今や東西の大學長として、新らしく學園を率ゐて立たうといふのだ。學術研究振興の聲が喧ましい今日、何といふ壯觀であらう！　しかもだ、長岡さんと本多さんとは、切つても切れない師弟の間柄、此の師にして此の弟子ありで、實に、兩博士の存在こそは、輕薄な今日の時勢に、何かしら力强い信賴の念を、われ〳〵に湧き立たせる原動力である。

長岡半太郎博士

長岡博士が、世界的に有名になつたのは、あの水銀から金を取り出すことに成功した實驗だつた。これは、もちろん、工業的に試みて算盤のとれる仕事ではない。けれども、水銀を原子に分解すれば、そこから金がつくれるといふことを實驗してみせたことは、宇宙を造り上げた神樣の秘密を科學のメスで切り開いて見せた事にひとしい。全世界がアッと驚嘆したのも無理はない。

だが、博士の研究で最も獨創的なのは原子の研究で、原子の構造圖が天體の構造と同一であることを發見したことだ。これは一九一三年一足違ひでデンマークのボーア氏に先んじられてしまつたが、博士の研究は充分に認められた。

最近ではスペクトラム即ち光の分析を專ら研究し、その研究のために長岡の水銀燈の發明となり、メートル原器を光の波長によつて決定する理論を完成し、このためには『長岡ランプ』を使用すべきことが國際的に決議されてゐる。

また學問上の無線電信では日本一といはれ、短波長の無電が或る距離において聞えず、それ以上遠くなるとまた聞え出す理論が博士によつてはじめて發見された。また地震の研究でも知る人ぞ知る權威だといはれる。

長岡さんの故郷は、長崎縣の大村町だ。大村藩士長岡治三郎といふ人の長男で、慶應元年の生れだから、本年六十九歲だ。小學校時代は郷里で暮したが、後に東京に出て中學に入り、途中でお父さんの事務の都合で大阪へ行き中學を出るまで三年ほど大阪で暮した。

『だから、大阪だつて、まんざら緣のないこともないんだぜ』と、博士も笑つて語つたことがある。

中學を出てから再び上京、今の一高の前身たる大學豫備門に入り、大學に進み物理學科を出たのが明治二十年、當時は物理學なんどをやらうといふ篤志家は餘りなかつたので、その年の卒業生といふのは博士一人つきり。たゞ目下九州の明治專門學校の教授をしてゐる今川覺神氏が、選科生として同級にあつた。

この今川氏と博士とは、大の仲よしで、二人一緒になつて大學中を盛に暴れ廻つたもので、その頃現宮中顧問官山口鋭之助氏が上級にゐたが此の山口氏を大猛とし、博士を中猛とし、今川氏を小猛とする大學の三猛といふ言葉があつたといふくらゐだから、その狀や推して知るべきだ。

大學を出て大學院に入り、次いで助教授に任ぜられ、二十六年からドイツに留學し、歸朝して教授になつた。この時、學生の中に今の本多光太郎博士がゐたのだつた。學生本多の頭腦の緻密と、死もの狂ひの勉强とは、スッカリ教授長岡の氣に入つた。こいつあ見ど

ころがあるぞと、それから日夜つき切りで熱心に指導した。

大體、博士が後進を指導する態度は、實に親切だ。細かい點までよく面倒をみる。それで博士と弟子との間柄は、昔の寺小屋時代の師弟に見るやうな美しいものがある。しかし、その代り流石に往年の三猛の一人だけあつて、叱る時も遠慮なく怒鳴りつける。弟子が間違つた實驗などをやつてゐると、そんな馬鹿なことをする奴があるかッと、それは〳〵大變な權幕だ。だが、至つて天眞爛漫だから表裏がなく、すぐカラリと晴れて懇切に手をとつて教へてくれる。博士のことを門下生は雷親爺とニック・ネームを奉つてゐるが、この雷親爺の門下に育つた學者には、前記の本多博士をはじめ、前京大總長の新城新藏博士、東大教授の寺田寅彦博士やアインシュタインの紹介で有名な石原純博士など、錚々たる學者が輩出してゐる。

長岡博士の家は、帝大に近い本郷西片町にある。訪れた人が面喰ふことには、此の家には表札が揭げてないのだ。質素な洋風住宅だが、確かに此の家だと聞いて來たのでよく見

ると、玄關脇の柱にペンキで長岡の二字が書いてある。いたづら書きに似た氣輕なやり方だ。決して嚴めしい門構へをやらないところ、この頑強な性格の人の半面を語つてゐて面白い。

この間も、大阪帝大の開學式に臨んで、着て來たのが十九世紀のケンブリッヂ大學の眞赤なガウンで滿場をおどろかしたが、訊く人々をつかまへて、

『これあ、つまり、こんなつまらぬ形式だけは大阪帝大に入れたくないといふ一種の示威運動さ、形式は大嫌ひだ』と呵々大笑してゐた。

こんな風に、博士の性格は非凡なほど世間離れがしてゐた。それで、その一言一行がいつでもゴシップの種となつて新聞や雜誌などに書き立てられる。ひどいのは他の學者の奇行までが、いつの間にか博士の奇行として傳へられることだ。研究に夢中になつてゐて日露戰爭を知らなかつたとか、大正十二年の震災には壓死を傳へられたが、何ぞはからん大學の研究室に閉ぢこもりグラ〳〵搖ぐる中で地震計を覗いてゐたとか、その他、等々。

が、それこそ何ぞはからんだ、日露戰爭については最も興味をもつて研究してゐたのが長岡博士だ。少年時代から歷史の研究が好きで殊に支那の歷史と來たら三度の飯よりも好き、一時は自分の專攻科目を歷史にしようとさへ思つたほどだつたが、文明開化の時代に先驅する意味で物理學の方へ進んだのださうだ。だから、今でも支那の歷史は常に研究してゐるし、支那文學の典籍などには日常親しんでゐる博士だ。日露戰爭に關しても、世人の想像出來ないやうな深いところまで、突きこんで研究してゐるのだ。

大震災の時も、大學の研究室にゐたのではなく、毎年避暑に行く相州下浦の借別莊に浴衣がけの生活を樂しんでゐたのだつた。それも極めて素朴な百姓家をそのまゝ自分の住居としたので、飾らない博士の性格がそのまゝ出てゐたものである。もつと博士らしく思はれるのは、その百姓家の裏庭に、博士は自分で石室を築いて、そこに氣壓微動計を裝置し、自然科學者としての研究を怠らなかつたことだ。それが九月一日に地震でメチヤメチヤに破壞されてしまつた。豪快な博士は、壞はれた器械の前に立つて、『痛快にやりをつたナ』と呵々大笑したさうだ。地震といふ、人類にとつては暴虐な大自然の行爲に對して、それ

は何といふ朗らかな態度であつたらう。しかし、その朗らかな態度の裏に、今に見ろ、人類は大自然を征服するぞ、といふ強い信念が、博士の胸中に旺盛に燃えてゐたことを誰も否定しないであらう。

本多光太郎博士

昭和六年五月二十日、米國のフィラデルフィアのフランクリン協會では、我が東北帝大の本多光太郎博士にエリオット・クレッション金牌を授與し、大使館を經て博士に傳達方を依頼した。これはその前年春、同協會で決議されてゐたことで、その當時日本の新聞にも報道されてゐたやうに思ふ。この名譽ある賞牌は、一八四二年に制定されたもので、世界的發明や獨創的研究を完成した學者を選んで、毎年一名づつの割で授與するものである。一九二八年には、自動車王ヘンリー・フォードが『顯著な工業上の指導者』として授與されてゐる。だから、その權威のほども想像出來るだらう。本多博士は、まだ此の外に無數の權威ある賞牌を手にしてゐる。大正十一年の夏には歐洲航路の一汽船は、博士のために世

界最高の賞牌の一つであるベッセマー金牌を戴せて英國から戻つて來た。その金牌に附せられた書面には、英國鐵鋼協會の名を以て學士が世界の鐵鋼研究に對し、絶大の學術的貢獻をしたことについて、厚い感謝の文字が列ねられてあつた。

また昭和三年には、あの有名なノーヴェル賞の榮ある候補者に擧げられた。やがて近い將來に、我國にもノーヴェル賞を獲得する人物を博士において見出すことが出來るのだ。思へばうれしいことではないか。

それからまた、博士が一たび外遊するとなると、世界各國から、ぜひ立ち寄つて貰ひ度いとの案内狀が山のやうに舞ひこむ。それにはロンドンの消印やベルリン、シカゴのスタンプも捺されてゐる。『鐵の征服者本多博士の講演をお願ひする』と文面に書かれてゐる。

このやうに、世界的に有名な博士は、一體どんな人物かと思つて會つてみると、大概の人はおどろいてしまふ。古ぼけた背廣を着て、イガ栗頭のドス黑い顏だ。博士を、東北帝大の金屬材料研究所に訪問した名士が、小使と間違へて失敗したといふナンセンスは度々

聞かされるところだ。

それもその筈、博士は三河のお百姓の倅で、十七歳までは村で野良仕事をしてゐたのだ。たゞし、家には相當財産もあつて、次兄の淺治郎氏は東大に在學してゐたので、暑中休暇で歸省すると、少年の胸に遠大の理想を吹きこんだものだ。そこで心氣一轉、百姓生活を一擲して上京、神田の豫備校に二年通つて、檢定をとり、一高の試驗を受けると見事にパスした。それから東大の長岡門下に弟子入りして、明治三十年大學を出ると歐洲に留學し、英國のタンマン博士をはじめ、獨佛の學者にも師事して、具さに鐵と合金との基礎學を研鑽した。

博士は洋行前、少壯三十歳にして鐵の磁性に關する新學說を生み出して理學博士の學位をとつてゐたが、留學から戻ると東北帝大に聘せられ、その附屬鐵鋼研究所に立て籠つて、物凄い勢で研究に沒頭した。

この鐵鋼研究所は、今日の金屬材料研究所の前身だが、住友が三十一萬圓の巨費を投じて、實に博士の研究のために建てゝくれたものであつた。

こゝで生れる次々の大研究——例へば世界最强と稱せられるS・K磁石鋼や、絶對不變金屬防彈特殊鋼など——はその發表毎に世界の學者を驚かせた。たゞ驚かせたゞけでなく、怖れしめもした。何となれば、此の研究を見てもわかるやうに、博士の發明するものは皆、鐵だ。陸軍や海軍で、一番必要とする武器の鐵だ。野砲位の彈ならハネ返す强くて固い鋼鐵だ。また、正宗の銘刀にもまさる鋼の大量生產法だ。こんな次第で、軍機の秘密上發表されない研究も澤山にあるらしいが、とにかく博士の存在は、日本にとつて有難いが、外國にとつては怖ろしい。しかし、さういふのは餘りに軍國主義的な觀察で、世界全體から考へれば、やはりかうした偉大な研究を完成した學者は尊敬しなければならない。そこで、『鐵の本多』として、博士の名は世界的に知れ渡り、世界各國から畏敬されてゐるのだ。

本多さんは、地味で、鐵のやうに固い感じのする人だ。けれども、その半面春風のやうな、やはらかな情愛の持ち主である。

大正十年の暮だつたか、仙臺市米ケ袋の博士の家に、コソ泥棒が忍び入つたことがあつ

た。博士がトビ起きると、泥棒もおどろいて逃げ腰でゐる。危險がないと見た博士は、こちらへ來いと、泥棒氏を靜かに呼んで、机上の五圓札を渡した。そして、『以後は決してこのやうな所業をしないんだぞ』と、懇々として諭した。泥棒はまだ二十歳前後の青年であつたが、博士の溫情にほだされてか、兩眼の涙をふいてゐたさうである。研究一點張りで冷徹な科學者と見ゆる博士は、案外溫い心の持ち主なのである。

早大總長田中穗積博士の横顔

花形教授時代

時は、まさに日露戰爭の直前だつた。都の西北に、私學の誇りを高く揭げて、天下を雄視する早稲田大學では、續々と相次いで外國留學から歸朝した新進有爲の少壯教授を迎へて湧きかへるやうな活氣を呈してゐた。歐米の新知識を豊富に齎らして、これからの日本學界に、虹のやうな氣焰を上げようとする人々とは誰々ぞ？　曰く島村抱月、曰く金子馬治、曰く坂本三郎、鹽澤昌貞、田中穗積の五氏であつた。丁度、三十五年に東京專門學校から早稲田大學と改稱したばかり。その上、更に法科と文科の外に、商科を增設して、堂堂官學に拮抗する陣容を整へようとしつゝあつた頃であつたから、豫め前途多望の俊英を選んで歐米に留學させてあつたのだ。

果せる哉、これら第一期早大留學生として派遣された人々は、歸朝早々、それ〴〵の學

問的分野に發刺たる活動を開始して、學界のみならず、廣く社會に大きな刺戟と衝動とを與へたものであつた。即ち、島村抱月氏によつて早大の文科は再興し、しかも新派運動の萠芽さへもそこに生れ始めたのではなかつたか？　また、金子馬治教授によつて早大の哲學畑は、多數の人材を輩出し始めたのではなかつたか？　法律學の坂本三郎、經濟原論の鹽澤昌貞、財政學の田中穗積、この三氏の新知識と新思想とが、また天下の青年學徒をして、早稲田の森に多大の魅惑を感ぜ！　たのではなかつたか？

この頃のこと――此の第一期早大留學生組の教授間にあつて、最年少の俊材を以て謳はれてゐた田中穗積氏に宛てて、一通の書狀が屆いた。開けて見ると、本鄕の帝大からだつた。法科大學々生の組織してゐる理材科月次講演會が、從來の帝大教授ばかしの講演には飽き〳〵したから、都下各私立大學の教授を招聘して、新味ある催しをしたい、就いては是非とも御出演賜りたいといふ文面だ。まだ三十になるかならないかの、活氣橫溢の田中氏だつたから、早速『OK』と快諾を與へたことは勿論である。

ところが、帝大の主催者側には、一つの魂膽があつた。私學に蟠踞して官學帝大に對抗

しようと考へてゐる生意氣な學者をよんで、一席御高話拜聽を表向きに、內々は大いに理論鬪爭を挑んで、彼等の油を絞つてやらうといふのであつたのだ。それで、招聘すべき講師も、帝大以外の花形學者で、なるべくならば氣焰萬丈の手剛い奴がよいといふ目算で、アレカ、コレカと選擇した結果、遂に決定を見たのが左の四氏であつた。

早稲田大學　田中穗積　慶應義塾大學　堀江歸一
慶應義塾大學　福田德三　東京高等商業　佐野善作

このうち、佐野氏は現に東京商科大學學長であり、福田、堀江の兩氏は今は故人であるが、共にわが經濟學界を背負つて立つ大學者であつたことは世間周知のことであらう。

當時、福田博士は時の高商校長松崎藏之助博士と衝突して教授の地位を投げ出し、三田の慶大に迎へられて、雄心勃々、天下を睥睨してゐた時代であり、堀江博士は田中氏と同樣海外留學を終へた少壯教授として、これから大いに賣り出さうとするところであつた。かつ田中氏が早大に教鞭をとる傍ら東京日日新聞に關係してゐたのに對し、堀江氏は時事新報に筆をとり、その才氣煥發の文才と論陣は、早稲田の田中、三田の堀江と、旣に早くも

その頃にあつて並稱されてゐた人物だ。當代の花形學者として、帝大が此の四氏を選んだことは、まことに當を得てゐたのであつた。

が、帝大側の作戰が、洩れぬといふ筈はない。ひそかに胸中決するところのあつた田中氏は、進んで當日の先鋒を買つて出た。帝大法科の大講堂に、立錐の餘地ないまでギッシリ詰めかけた赤門學徒の視線は、ひとしく此の壇上の少壯學者に注がれた。演題は『マルサスの人口論』だ。沈着な態度の中に、敵を呑んでかゝる氣宇を見せた田中氏は、徐ろに開口一番、英國の學者マルサスによれば、人口は幾何級數的に增殖し、食糧は算術級數的に增殖する。故に生きんとする人類の繁殖に對して、食糧の不足は、こゝに犯罪と貧窮と飢餓を生んだと說いてゐるが、これは何ら憂ふるに足らず、人類の知識の進步、生產技術の發達は、この食糧不足問題を克服するであらう。吾人はどこまでも文明を發展せしめて、自然の脅威と鬪はねばならぬ。と滔々二時間に亙つて、各國經濟學者のマルサス批評を開陳しつゝ、大雄辯をふるつたものであつた。初めは銳い質問と彌次で大いに惱ましてやらうと目論んでゐた赤門學徒も、演題が當時にあつては比較的新らしいマルサス人口論、し

かも、その新知識と造詣氣魄にみちた熱辯に壓倒されて、計畫はスッカリ畫餅に歸してしまつた。續いて登壇した福田博士も、該博の蘊蓄を傾けて田中氏の所說に贊成し、何のこともない宛然田中氏獨りを花形たらしめるやうな講演會となつて幕を閉ぢたのだつた。

——さて、時代は移つて、今日となる。早稻田大學では、高田早苗博士の辭職に伴ふ後任總長選定において、理事會の滿場一致を以て推薦された人こそ誰あらう、常務理事田中穗積博士、即ち往年少壯學者として、帝大の小冠者輩に一泡吹かせた雄辯家の田中氏その人であらうとは。

病弱の秀才兒

田中總長には、その少壯當時から『殿樣』といふニック・ネームがあつた。その容貌に、いかにも華族の若殿らしい上品さがあり、その態度にも、貴公子の端正さを失つてゐないためであらう。前總長の高田博士も、若い頃は頗る美男子で、第一回の國會の當時は衆議院第一の美男を以て稱せられたのだが、田中博士もフロックなどを着たあたりは、どうし

ても天晴名門の若殿樣ぶりであつた。それもその筈、田中博士は、信州松本近在の多額納稅者の家に生れた人だ。今日でも博士は、早稻田の幹部中、隨一の財產家で通つてゐる。その點、博士は、貧苦に身を起した所謂立志傳中の人物とは、少しく徑路を異にしてゐると言へるかも知れない。

——だが、それかといつて、博士が安易な人生をスラ〳〵と、今日の地位にまで自己を高めて來た人だと思つたら、大變な間違ひだ。それは何故？　マア急がずに、追々と述べていかう。

いふまでもなく、博士は才分に惠まれた人だ。古い形容詞でいへば、幼にして彗敏、夙に神童の名ありといふところだ。その代り、身體の方はお定りの頗る柔弱。才子多病といふやつである。中學へ進む時などは、醫師が『學問はおやめなさい』と止めたものだつた。が、中學だけは、危ぶまれつゝも、どうやら卒業することが出來た。だが、もうそれ以上は、上級の學校に進むことは、見合はさねばならなかつた。何となれば、病弱の身で、遠く都に出て勉學することは、兩親も反對したし、自分でも身體がそれに耐へ得るといふ自

信がなかつたからだ。

が、問題は、技にある。普通ならば、家に財產があるに委せて、ブラ〳〵と青年時代を遊んで過してしまふものだ。そこを、博士は考へたのである。自分は、體質虛弱だ。戰國の世なら、馬上槍を揮つて戰場を馳驅することなどは、とても出來ない。だが、昔であつても、學問さへすれば、經國の師として一世に仰がれ、また軍師として百萬の兵を動かすことも出來る。自分の身體で武が駄目ならば、ヨシ自分は文で起たう。學問と思想とで、國家と社會とに貢獻しよう。政治や經濟を自分の筆の力、辯論の力で、正しい方向に動かして見よう——かう考へたのだ。それからの博士は、決して身體の弱いことを悲觀しなくなつた。悲觀しないのみか、積極的に、この弱い身體を巧みに取扱ふことによつて、人並以上の勉强をし、かつ、養生と鍛錬とによつて、漸次に丈夫な身體に改造してゆかうと決心した。

さて、これから、博士の用意周到な自己統御が始まつた。博士は、自宅にあつて、一方には各種の健康法を行ひつゝ、他方にあつては早稻田の講義錄を取り寄せて勉强すること

にした。直接教師に就かなくとも、博士の頭腦を以てすれば、學ぶにさして不自由ではなかつた。グン〳〵眼に見えて知識が進むのを意識しないではゐられなかつた。と同時に、健康の方も、薄皮を剝ぐやうに病弱の衣を脱いでゆき、居ること二年、もう東京へ出ても、それほど危險でないところまで漕ぎつけた。

さあ占めた。病褥に讀書する境遇から脱する日が來た。一つ、自分の力を驗してやれと、博士は東京に出て、當時まだ東京專門學校と稱してゐた早稲田の編入試驗を受けてみたところ、一躍政治科第三年級に登第したのだつた。おかげで、博士は僅々六ケ月で同校を卒業したが、時に明治二十九年、二十一歳の弱冠であつた。しかも、その卒業成績は拔群であつたので、卒業後は同校に殘ることになり、後に選拔されて早大最初の留學生の一人として、歐米に遊ぶ身となつたのである。

方向轉換

博士は最初、志を政界に馳せてゐた。それで、早稲田を卒業してから、研究の傍ら『讀

賣新聞』に關係し、論壇に卓犖の識見を吐露して、政治經濟上の指導者としての任に當らうと努力してゐた。洋行から戻つてからでも、早稲田の教職兼務で『東京日日』の社員となり、當時の社長加藤高明伯の知遇を得て、侃々諤々の論陣を張つたものだつた。例の鐵道國有、減債基金法案が議會に提出されて喧ましかつた頃など、盛に雄健の筆を鼓して反對し、大いにその存在を天下に知らしめたものだ。が、その後持論の行はれないのを慨し、一つには日日新聞の主筆横井時雄氏が、西園寺内閣の私設秘書官の如き觀を呈し始めたことに嫌氣がさして、東京日日を退いてしまつた。

が、これで田中博士は志を棄てたわけぢやない。博士は、早稲田にあつては、學生を集めて日本最初の新聞研究會を起し、また、當時安部磯雄教授が會長であつた雄辯會にも關係して、將來自分の同志となるべき若き學徒の養成に餘念がなかつたのであつた。新聞研究の方では、東京日日を退いた學士は、『東京毎日新聞』を引受けて、その社長兼主筆となり、新聞を土臺として他日雄飛に備へてゐたが、學生の研究用として『東京毎日』を提供し、今日の大學新聞學會の先驅となつてゐた。

また辯論の方では、夙に辯論會の學生らと共に各地に遊說し、その卓越した論旨と雄辯とに、新時代の青年を强く惹きつけるものがあつた。當時巡回講演の一員だつた、坪內逍遙博士は新總長に對する所感の中で次のやうに述べられてゐる。

『同じ旅館に起臥し、同じ場所で、何度も相前後して講演したので、先づ君(田中博士)が、才學ともに、尋常でない人であることを知つた。さうして其風采や態度や演說ぶりに、どことなく若き日の尾崎行雄君を聯想させるものあることを認めた。(後略)』——あゝ、若き日の尾崎氏を偲ぶ田中博士の、颯爽たる雄姿を想見するに難くないではないか。だが、しかしながら、かうした田中博士を長く見ることは出來なかつた。往くとして可ならざるなき博士ではあつたが、たゞ一つ、その健康が、博士の活動を拒んだのだつた。當時、博士の門下生だつた永井柳太郎氏が、また、田中新總長への回想の中で言つてゐる。

『——田中先生は僕等にとつては、常に親切なる指導者であつた。以前先生は今日程健康でなく、屢々病氣に惱まされ、時として學校で卒倒せんとせられたこともある位であるが、僕等學生の研究會等に對し、先生が屢々病をおして出席し、僕等の指導に努められたことは、今なほ感謝せざるを得ざるところである——』

此の病弱が、遂に、博士をして政界に馳驅する志を擲たしめた。そして、むしろ、大學にあつて後進の指導に任ずる教育の事業こそ、自分に最も適當なのではないかと思はしめた。ここに、田中博士は、翻然として『東京毎日』とも緣を切り、專心早稻田大學の建設と、學生の指導とに沒頭することになつたのだ。この轉換あつて暫く、明治四十三年には、その財政學の研究によつて、法學博士が授與された。

大早稻田の建設

その後の博士は、早稻田大學の成長が、最も雄辯に學士の事業を物語つてゐるであらう。博士は常務理事として高田總長を助けて、鋭意『大早稻田の建設』に盡瘁し、殊に大學の經濟的の獨立には、粉骨碎身して之に當つた。大正九年に、早大は新大學令による綜合大學に昇格したが、この資金の如きは、田中博士が、かねての用意に拵へてあつたものだといふことだ。その他、大隈記念講堂といひ、大圖書館といひ、官立大學を凌ぐ壯麗な輪奐

の美は、即ち田中博士の財政的手腕を象徴するものだと稱されてゐる。口の悪いのは、田中博士は、國家社會の財政學から、大學經營の財政學に轉換したとさへいつてゐる位だ。だが、これといふのも、いかに博士が、一意、志すところに孜々として努力する人物であるかを窮ふに足りよう。

けれども、斷つておきたい。といふのは、學士はかうした半面に、孜々として人格の修養を忘らなかつたといふことだ。體質の虚弱を征服するために、極めて愼重な養生を幼時から守りつゝあつた事は、既に述べた。人格の修養においても同樣で、絶えず自己の人格を向上させるやうに、念慮を拂つて來た。今日の博士は、煙草を喫ふ位が關の山で、讀書以外には殆ど道樂といふものがない。そして、誰しもが認めるやうに、博士には壯時から絶對に不品行といふことがないのである。その生活は、いかにも學者らしい清楚なものなのだ。

大體において博士は、正直すぎる程率直な人だ。そして、情にも厚く、殊に後進を愛し、指導すること慈父の如きものがある。これらが、博士をして第三代目早大總長の椅子に上

らしめる人氣を生んだものであらうか。

博士は、かつて高田總長代理として、新入學生一同に對して一場の訓辭を試みたことがあつた。その時博士は、博士が私淑する十九世紀の天才ギュヨー——彼は十九歳の弱冠でフランスのアカデミーから表彰された——の人生觀をひいて曰く、

『人生最大の價値は、人々各自の人格を出來るだけ高め、出來るだけ深め、出來るだけ強くすること、これが人生で一番大切な仕事である。換言すれば、人格の向上發展こそ、人生における最大價値である』と。

今、われわれは諸君と共に、田中博士の既往をふりかへつてみよう。まことに此の言葉の如く、その生涯は、孜々として倦まず撓まず、その人格の向上完成への努力の連鎖ではなかつたか？　偉人はすべて全力主義だ！　ギュヨーは不幸夭折したが、田中博士は今や五十八歳、その働き盛りを第三代目の總長として、全早稲田を率ゐて多難の前途に立ち向つてゆかうとするのである。これを以てすれば、博士もまた當代の得難き一人物でなければならない。

創立五十年祭を迎へた早大が、この總長を推戴して、前途に層一層の光輝を放つであらうことは、言を俟たぬ。

東都大學名物教授

早大の巻

スコットランド産ながら『どうも毛唐といふ奴は怪しからんよ、殊にヤンキーは嫌ひだ。やり方が汚なくていかん』なんて罵倒をあびせかける毛唐人、それはキング・ジョージのお顔に似た早大講師コックス先生だ。明治十年三歳にして日本に來り、大正九年日本に歸化した人で、名も古楠顯理と改め、スッカリ日本人になり濟まして『毛唐は、毛唐は』とやつてゞざる。日本語の達者なことは勿論、酒落の大家で、どんな駄酒落の大家でも受太刀になる。日本語で危うくなると英語交りで應酬するんだから厄介。しかし、酒落の外に好きなものはスポーツと酒。『先生、今日の午後はリーグ戰があります』とクラス代表が申しこむと、皆までいはせず授業は休み、先生自ら眞先に立つてスタンドに納つてしまふ。こんな狀態だから人氣百パーセントだ。

早大にはまた杉森孝次郎教授がゐる。教壇の上をチョークを弄びながら、左から右へは
ては頭を押へてはロをモゴ〳〵させながら、その有り餘る學識の中から何を喋らうかと苦
心するさうな。しかし、文章を書かせれば杉森式の異色ある名文で、堂々大論文をものし
て民衆指導の大任を果すところ、天晴哲人思想家としての面目躍如。それでゐて子供のや
うに率直で愛嬌があるから杉森哲學と杉森教授とは永久に早稲田の名物だ。

も一人名物教授を拾ひ上げるなら、理工科に今和次郎教授がゐる。考古學の向ふを張つ
て考現學とやらいふ新らしい學問を編み出して、自らその開祖を以て任じてゐる御仁。い
つも職工服を着込んで設計用の延尺をポケットの中に入れてブラリ〳〵と町を歩いては、
御婦人が奇妙な靴をはいてゐるのを見ようものなら、秒藏の物差をぽんと投げつけて、そ
の靴の長さや幅をお計りになる。新宿や銀座に出沒して、看板の形狀や文句を調べてゐる
かと思ふと、早稲田界隈の下宿の窓を校舍の高臺から望遠鏡でのぞいて、トランプをしてゐ
る學生何人、勉強してゐる學生何人と統計をとつたりする。四十過ぎてから洋行したがバ
リヤニューヨークでも、例の物差を持つて歩いたので外人は皆ビックリしたといふことだ。

帝大の巻

五尺たらずの小柄でも、頭は滅法鋭いガンちやんこと末弘嚴太郎博士は、何しろ名物教
授中のピカ一だ。自分で自動車を運轉して登校する。故障が起ると、街路でも平氣で自動
車を止めて修繕する。コソ〳〵と小さい身體で自動車の下にもぐりこんでゆくところなど
は、スツカリ玄人である。これで滿堂を唸らす名講義をやらかすんだから、人間も、かう
なればエライものである。

動物學でおなじみの谷津直秀博士は背が高く、雨が降ると洋服に高下駄をはいて、本郷
の街路をテク〳〵と歩いて大學に通はれる。この教授の時代を超越したやうな姿は、慌だ
しい大都市の風景にとつては、昔なつかしいノンビリした情感を與へる點景ではある。

前醫學部長の林春雄博士も、赤門名物になくてはならぬ人。頭はツルリと禿げ上つてゐ
るが氣は若い。都下八大學のボートレースでは委員長として、その禿頭と巨眼と八字髭が、
隅田川では呪ふがきく。日露戰爭の際、出征兵士に同情して以來、今だに嚴寒中と雖も足

袋をはかない。

慶大の巻

三田の慶應には野球で有名な腰本壽監督が英語の教授をしてゐるが、講義は頗る嚴格で學生はギュウ〳〵いちめつけられるといふことだ。昔福澤桃介さんと福澤諭吉翁の愛孃を爭つた清水靜文教授が、今なほ經濟原論を擔當してゐるが、老いたりとはいへ眼光鋭くどことなくエラ者らしいところがある。文學士と法學博士とドクトル・フイロソフイエとの肩書持ちの氣賀勘重教授は、三田生え抜きの元老で農業政策の權威。しば〳〵風邪にかかるが、首にまく眞綿は鼠色を呈してゐて、農村を思はす如くボツリ〳〵と述べる講義には味がある。學生は『氣賀顚倒』などとニツケネームを奉つてゐるが、また名物教授たることを失はない。ピカ一ともいふべきは小泉信三教授で塾第一の美男、長身をゆた〳〵させてゆく姿は、菊五郎に似てゐるといふ。いづれ總長の有力候補の一人である。

法政明治その他

法政大學の高木友三郎教授は、經濟學の講義の時間には海外到るところで見て來た猥談をまじへるので講堂はいつでも押すな〳〵の大人氣。專修大學の道家齊一郎教授が『世界女見物』で有名なのと好一對。月々の雜誌に單行本に、さかんに才筆をふるつてゐる明大の赤神良讓教授の社會學は氣焰萬丈で、駿豪健兒には大受けである。陽氣な性質で、學生が遊びにゆくと歡迎し、洋行中に蒐集したキツスの繪を澤山見せてくれるさうだ。

學界雄辯家の群像

學界の雄辯家は誰か？　となると一寸むづかしい。三宅雪嶺博士のやうに訥々と語つて聽衆に深い感動を與へる人もあれば、能辯至らざるなくして、而も內容甚だ空疎なる御仁（これは名前を差控へよう）もある。難解なことを平易に――所謂學者氣質とは反對に――而も平凡なことに含蓄をもたせて語ることが、即ち雄辯の一種だとすれば、前早大總長の高田早苗博士などは、その第一人者といはねばならない。どのやうな場合にでも、淡々たる澁味の中に興趣豊かな諧謔をさし挾みつゝ抑揚巧みに空氣を操るところ、落語でいへば眞打の權威は充分にある。帝國學士院長の櫻井錠二博士なども此の類だ。その他松村松年、富士川游、谷本富の諸博士など古いところではいくらでもある。

が、これは、圓滿な常識と、完成された人格との產物である。駈け出し學者の容易に眞似られるところではない。

學者は研究が生命であるか　肥料化學の作用を說明するに口角泡をとばして叱呼するを要しない如く、肥料化學の問題を論ずるに敢へて、ゼスチユアたつぷりであるにも及ばない。つまり學者の辯舌が魅力をもつのは、主としてその內容の深さや理路透徹にあつて、政治家などが大見得を切るのとは些さか樣子が違つて來る。かと言つて、平素は寡默なる學究であつても、一たび風雲に乘ぜんか、あの一八〇八年の哲學者フイヒテのやうに、『ドイツ國民に告ぐ』の大雄辯が、佛國の勢力に打ち拉がれてゐた全國民をして起ち上らしめた如き偉大なる力を發揮する例もあるのだ。

昔話はともかく、現代は社會的激情の時代である。從つて直接大衆に呼びかける華やかなる雄辯の士も學界に輩出して來た。或ひは理論家型乃至は論戰家型、或ひは講談師型、或ひは新人型、大道藝人型、志士型、詩人型、ラウドスピーカー型――と千姿萬態、なかなか賑やかな有樣である。

先づ牧野英一博士である。東大教授といふよりも、當代切つての刑法學者。書くことも

喋ることも、歌ふことも（彼は歌人である）その得意とするところであるが、壇上氣焰を揚げることは、とりわけ好きらしい。自慢の三分刈り頭をおつ立て〳〵壇に登るや、グルリと一同を見廻してから口を切る。

清く整つた謹嚴な風貌、殊に强度の近眼鏡の奥に閃めく理智的な瞳、やゝ神經質らしい擧止はあるが、どうして一分の隙も見えぬ。

『エー皆さん、此の牧野が……』と、少し芝居がかつたやうな、然し底氣味惡いやうなトーンで續ける。冴え切つた彼の頭腦が生む利刄の如き論法は、容赦なく旣成法學の牙城に切りこんでゆく。そしてその顏は輝き、舌端は燃えてくる。條文に拘泥せず、條文の裏に閃めく理念を生かさうとする自由法學の――曾つてあの黑紋付に白足袋といふ莊重な國士的姿態で、若い學生の人氣をあふつた故上杉愼吉博士が『牧野は無法もまた法なりと主張する』と皮肉つたといふ――その理想は、壇上に棒立する彼の全身と共に燃え上がる。滿堂思はず片唾をのむ。

彼の此の見事な論理の切れ味と熱とは、彼が講演、講義、卓上演說の區別なく聽衆の心

を促へる蠱惑力である。だが、聽衆はその輕い興奮からホッとさせられると、其の陶醉が單に話の上手さから來てゐるやうに感じられて來る。辯に巧まずして、而も巧んだかのやうな――。

末弘嚴太郎博士も、やゝ此の牧野式である。精悍の氣は五尺一寸の矮軀に溢れ、齒切れよい論理の進程は、二時間でも三時間でも聽衆をして倦怠を感ぜしめない。殊に卓上演說になると、その活動的な態度に好感が湧き、うがつた解釋と說話とに　忘れられない印象を刻みつける。まことに才氣人に迫るものがあつて、それでゐて聽衆は何となく輕い失望の襲うて來ることを拒めない。

畢竟、これは其の才氣が先驅して、眞理を說く學者たる前に、一個の話術者として印象づけられるからで、一歩を誤まれば獨りよがりの議論家、自家廣告乃至人氣取りの先生となるものである。講談師型――といふのは斯うした部類に多い。

が、此の御兩人は、其の論據の確かさに於て理智的な批判に堪へ得るものがあるから、まだよい。早稻田の內ケ崎作三郎教授になると、即ち『話し上手』になる。此の型は田舍

向きであり、また多分に大衆的價値に富む。尤も彼は代議士であり、政界人でもあるから、學者離れがしてゐる點は無理からぬが、或ひは學者離れがしてゐることを自認してゐるから、政界に入つたと見るべきであるかも知れない。但しこれは冗談。

同じ早大の青柳篤恒教授は、現代支那問題を提げて起てば頗る雄辯の士である。抑揚と、ゼスチユアと、自在なる話題の配列とを以て、聽衆の緊張と哄笑と感激とを、縱横に支配する本格的なうまさで、下手にゆけば講談師型に陷るが、彼のは熱涙をふるつて自ら壇上に泣く眞劍味がそれから救つてゐる。

明大と專修大學の金看板、小林丑三郎博士にも同じ危險がある。財政學では第一人者だと自他共に相許し、諸外國文獻の考證や新學說の紹介の豐富さに於て天晴老大家たるの貫祿を示してゐる。だが老いたりと雖も横に膨脹した短軀に溢るゝ活氣、ゼスチユアたつぷりで諄々として說く理論の明快さを見よ。若し夫れ、一たび政府の施政方針に觸るゝや、拳をあげて大見得を切る。流石は官界、政界、學界を渡つて來た元老である。しかし、これも餘りに雄辯宏辭であり過ぎて、却つて學者的には輕く見られる損な一例。

そこへゆくと彼の御曹子小林良正教授は型がガラリと違つてゐる。細身短軀の貴公子で親父がマルクス嫌ひの政治家肌であるに反し子はマルクシズムの立場を支持する篤學眞摯の經濟史家、講義は派手ではないが、それ以外では哲學、文學、音樂、シネマ、モボ、モガ論等々を會話中に織込み、多彩にして快適な談話者であり得る。

此の父と子の演說態度の差異相は、或る程度まで學界の過去と現在との差を反映してゐると見てよい。即ち良正教授にみる如き純正なる學界としての辯舌をもつ人は、大正中期以後に出た學者に一つの共通した型を與へてゐる。所謂新人型とでもいふものか？

例へば、森戸辰男、河合榮治郎、蠟山政道の三人を並べて演壇に立たすれば、そこに一聯の相似性が認められるであらう。その知識階級の理論家としての風格が、口を開かずして先づ聽衆に、何らかの新らしき眞理を囁くものゝ如き感じを與へるのだ。三人とも一高辯論部に育ち、青木得三、鶴見祐輔等々の後を承けて、學生時代から雄辯家で鳴らした人達であるが、鶴見式のゼスチユアは無い。むしろ一途に眞摯なる態度に訴へ、而も滿腔の

情熱をこめつゝ、一言一語、力强く理論の歸結を趁ふ態度である。

情熱の强度からいへば、森戸を第一に推すべきであらう。彼には、その執筆にかゝる論文が、其の儘演說草稿なんであるが、雜誌などで彼のものを讀むよりも、彼がその粘りづよい力にみちた美聲で朗讀するのを聽いた方が、より切實に心をうつものがある。その論文にみるやうに視野の廣い理論の構成と、マルキスト特有の、强剛な主張にもよるが、彼の演說にはそれに加ふるに、敵の牙城に肉迫する不屈の氣魄が、聽衆の魂を引ずつて、不知不識高い感激にまで導いてゆくところに、その魅力があると思はれる。

河合は今日、自由主義者らしい上品さの中に隱れてゐるが、旺んな鬪志は未だ消磨されてゐない。その若き日、一高に於ける『戰の將來を憶ふ』と題した演說は、改革者として旅立つ彼の胸中を吐露したものであつた。官界を棄てゝ、此の方十年、學究として東大の講壇に立つてゐるが、機會あるごとに人氣教授の一人として引出されるのは、一つはその雄辯の故にである。

ガッチリした體軀、底力のある聲量、眉宇に漂ふ精悍の氣、本格的な雄辯家としての資

格は具備されてゐる。流石に落ちついたもので、彌次の放つ言葉を巧みに拾つて、逆にそれを自說の展開に役立たせるあたり、餘裕綽々たる態度は修錬を積んだ彼ならでは出來ない藝當である。

蠟山は大體河合に似てゐるが、まだ幾分の見劣りがある。溫厚な英國紳士型で、思想的には前二者の混血兒のやうな立場である爲か、論旨に多少淸朗明快性を缺く憾みがあるが、一脈の情熱をかり立てながら、最後まで聽衆に倦怠を覺えしめないのは流石である。

その他慶大の小泉信三教授、早大の高橋淸吾博士、東大の那須皓、大內兵衞の兩教授なども、此の部類に總括してよい。

小泉は生粹の三田ッ兒、月に千圓からの書籍を買ひ込み、悠々として研究に沒頭出來る身分であるから、その惠まれた環境が、そのまゝ壇上の彼に具現されてゐる。端正な、リファインされた服裝、若し和服の場合ならば右手を袴の結び目の邊りにもつてゆき、ゆつたりとして而も犯し難い容姿、丁度學問させた六代目といふところである。誰かが彼を評して『智に働いて角立たず、情に棹さして流されず、意志を通してのびやか』と言つたが、

それは彼の演說に對しても適言である。

彼はその論文で見るやうに、水際立つた論理でぐん〳〵押してゆく。だが、巧まず、飾らず、無理な强調もなく、自若たる襟度のうちに深い學殖と、鮮やかな批判とを見せて、滿堂を息つく暇もない雰圍氣に置く。蓋し名手の一人である。

高橋は快辯にして度胸がありさうに思はれ、那須は流麗にして眞摯だ。大內は明快にして理路整然、聲量こそ小さいが、得意とする英國勞働黨の財政々策を批判する時の鋭鋒の明るさよ。凡そ明快なる批判は、それだけで若き知識階級を魅了するものだ。

以上の新人達とは、また別な味をもつ人に高田保馬、河上肇、小野武夫等の諸博士がある。いづれも風采甚だ上らない。然し一脈相通ずる志士肌な、經世家的風格が、深く藏せられた焰々たる情熱の吐氣と共に、香氣の如く聽衆を醉はしめるところがある。宗教家などに多くある類である。

雄辯家としての高田保馬の名をきくことは既に久しい。筆者は、彼が社會學者としてこ

れから大いに賣り出さうといふ時代、また廣島高師の講師であつた頃からその演說を聽いてゐるが、その頃から貧相な軀に垢じみた木綿衣を着、ヨレヨレの袴をはいて、肩を怒らしてゐた。熱して來ると、破れ扇で强く卓上を打ちながら、紅潮した顏をうちふり、大聲に叫び、激越慷慨、いかさま一個の志士的學者たるを思はしめた。十年後の今日、なほその調子に大體變りはないが、九大と京大に教授たる今日、昨日の激情は『蒼白き情熱』として內深く潛み、極めて素朴な穩やかさの中につゝまれてゐる。殊にその講義は莊重嚴肅にして且つ懇切、學生の質問には長い手紙で答へる程である。

法政大學にゐる小野武夫博士も村夫子然たる一人。而もその口からは意外に熱い聲が出る。縷々說き來たり、論一たび封建末期に於ける領主對農民の鬪爭にふるゝや、その口吻さながら今流行のマルキストを髣髴せしめるものがある。然し、彼はその表面的興奮の裏に、農民史實證の地味な研究家としての冷靜さを失つてゐないことをつけ加へておかう。

紀平正美、杉森孝次郎、長谷川如是閑——こゝらになると一人一黨、各人各說とでもい

はうか。その各人が英發する獨自の持ち味と、くつきりと其の性格に裏づけられた理論の特異性とが、他に類似をともなはない存在として先づ聽衆の好感を獲得する。

哲學者紀平正美博士の特色は、飽くまでもその學說の痛快味にある。第一その風貌からして、長身痩軀、蒼白き顏と鋭い眼、眉宇に現はれた哲學者らしい嚴肅さ。秋霜の如く犯し難いものである。どことなく超天才的な若しくは狂人のやうな峻烈味を以て人に迫つて來る。

彼は自分の學說は十五分間で全部說明出來る。その後の講義は給料を貰ふ爲に布衍するのであると學生達に言つてゐるが、その十五分間の哲學たるや、一種の直觀哲學であり、禪の妙境にあるものと見えて、彼以外には容易に到達出來ない。そこに彼の激しい舌刄が待ち構へてゐる。そして今古東西の別なく大概の哲學者達は『此の未熟者！』とばかりあへなくも粉碎されるのである。

『知行合一だなんて理窟を說いてゐる間は、王陽明もまだ本物ではない。吉田松陰やキリストは、三十やそこのら年配で、どうして主觀を脫却し得るか！』と小僧扱ひである。『今

日は誰かしら？』と、ひそかなる期待をもつて傾聽してゐると、果然、某博士が引出されたかと思ふと、見る間に眞向から斬下げられる。かくて彼は、激越の語氣、聽衆に先んじて興奮し、論旨は演題から脫線して痛烈を極める。壇上壇下、これ光彩陸離たる落花の圖、不安なる快感は場を壓して來る。哲學界の闘將——彼もまた一種の雄辯家でなければならない。

早稻田の哲人杉森孝次郎は吃々として語り、小首をかしげて沈思し、また拳を握りしめて語る。小柄で慓悍で、稚拙で愛嬌がある。彼獨特の難解な字句の文章に厭氣がさして讀むのを中止した人も、彼の演說ならばよろこんで聽くでもあらう。思索人としての深みも、その愛すべき人柄も、壇上に遺憾なく生動し、强く惹きつけられる點のあることは事實である。

長谷川如是閑は謎の人である。視野の多角的な、當代並ぶなき蘊蓄をもつ文明批評家として、また社會學者として、しかく高名であり乍ら、未だ彼の正體を究明し、眞向から叩きつけた人間はない。それだけに彼のもつ神祕性は、演說に於ても一つの魔力を發散する。

然し、彼は好個の說話者である。ユーモアと皮肉を點綴し、その書齋より得たる豐富な

話材や滾々として盡きざる思想を飽かしめることなく說いてゆく。皮肉な彼の性質のよくない惡戯の一つに、如是閑流の演說法といふのがある。つまり自說と異つた立場の人を先に登壇せしめ、自分はその次に出て先辯士の說を片つ端から反駁しつゝ、自說を展開するのである。これは大概、彼が演說の草稿を準備してゐない時に用ふる手であるが、聽衆は彼の攻擊力の痛快さにヤンヤと拍手し、如是閑萬歲を叫ぶ結果になる。此の惡戯なトリックに引つかゝつた名士も、かなりゐるやうである。

以上の人々とは少し調子が違ふが、京大法科のピカ一、行政法の佐々木惣一博士は、小柄で圓顏の人格者、『私のタテバと致しましては……そんなことありやしませんからナ……』と關西辯丸出しで、而も論旨堂々、明快なる立論は聞くものをして頭を下げしめずにはおかぬ力をもつてゐる。內容的雄辯とでもいふべきであらう。森戸事件に於ける特別辯護、社會科學事件後の大學自治權擁護等々、彼の內容的雄辯の幾つかは、歷史的存在となりつつある。

その他、溫厚な學者らしい風貌の中に子供のやうな感情で語る鳥居龍藏、酒をのむと雄

辯會の幹事のやうに雄辯家になる高野辰之等々の諸博士や底力のある聲と粗けづりな態度で、而も現實を徹視した細緻な理論で唸らせる高橋龜吉、國士風の長廣舌をふるふ北昤吉等々の如き論客が、學界の各方面に活躍してゐるが、少壯氣を負うて競ひ立つ花形雄辯家を求めるならば、東北帝大の鈴木義男教授は二高時代からの名手、昨年の總選擧には仙臺から起つた社民黨の赤松克麿を應援して、同僚の熱血漢河村又介教授と共に獅子吼し、當局から赤化教授(?)と睨まれたほどである。東京帝大には專修大學から來た好漢田邊忠男冴え切つた頭腦の山田盛太郎等の助教授が控へてゐる。中央大學には快辯の士川原次吉郎教授、法政には意氣、稚氣共に躍動する高木友三郎教授、專修の美男子道家齊一郎教授、音吐朗々たる日大の圓谷弘教授、京大では透徹する音聲と要領よい講義で鳴らす末川博教授や、流麗の快辯にアメリカ流のゼスチュアで辯じ立てる生物學者の駒井卓教授などがゐる。大阪商大にもアメリカ仕込の快辯家村本福松教授、これと好一對の、神戸商大の平井泰太郎教授、九大には十ケ國語の演說が出來る藤澤親雄教授など、書けば限りも無いから、此の邊で失敬する。

博士物語

末は博士か大臣か

『末は博士か大臣か』といふ文句が、明治の流行唄サノサ節の中にある。博士と大臣――それは當時の書生が一樣に胸に描いた理想の姿であつた。しかも、この唄の文句では、博士の方が大臣より上に行つてゐるところに、一つの時代色が看られる。

ところが、近頃ではどうか？　大臣、大臣で、世間では博士を大臣と並稱するどころか、遙かに博士を大臣の下位に置いてゐるのである。博士の價値も下落したといふべきだ。しかし、元鐵道大臣で民政黨の智惠袋であつた法學博士故江木翼氏に言はせると、『大臣になつた時よりも博士になつた時の方が、どれほど嬉しかつたか知れやせん。馬鹿でも運がよければ大臣には成れるんだから、人間の能力を現はす博士の方がずつと名譽だ』といふことだ。そこで、博士も、まんざら莫迦にしたものではないんである。現に、醫

者でも醫學士よりは醫學博士の方を有難がつて高い診察料を支拂つてゐるではないか。學士に就職難があつても博士にはない。げに、博士は大臣に及ばないものの、世の中は、博士なる哉である。

最初の博士

元來、博士といふのは、古昔、唐の文物が我國に輸入されたころ、朝廷の大學寮や陰陽寮などの官人を博士と稱したので、紀傳博士、明經博士、天文博士などの官名があつた。

此の官名としての『博士』が、學位としての『博士』に轉化したのは、實に明治になつてからで、明治二十一年五月七日を期して一齊に博士を授與された二十五人の學者が、所謂博士としての我國最初の人々であつた。その顔觸は、東京帝大の學者を主として、法、醫、文、理、工の各博士がそれ〴〵五人づつ選ばれた。法學博士の部には箕作麟祥を筆頭に、田尻稻次郎、菊池武夫、穗積陳重、鳩山和夫の五氏で、當時の第一流名士が揃つてゐた。工學博士の古市公威、文學博士の加藤弘之、外山正一、理學博士の長井長義、山川健